

# ドラゴンクエストV 迷い込まれし転生者

ひな太郎

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

大学生の主人公は夏休みを利用し、昔大好きだったドラゴンクエストVをプレイしていた。

全クリをした後眠気に誘われそのまま眠りについてしまったのだが、起きたらなんとドラゴンクエストVの世界に迷い込んでしまった。

サンタローズ村の武器屋の息子として転生した主人公は、ある日パパスとともに村にやってきたアベルと出会うことに。

前世の記憶を持つ主人公は、アベルに待ち受ける残酷な運命から救い出すことを決心。

壮絶な奮闘が始まる、のだが……。

「そういえば職業：村人なんだけど、俺大丈夫か……？」

※1. この物語はPS2のドラクエ5をベースに執筆しています。

※2. 設定に不備が見られた際は書き直しする恐れがあります。その際はご了承ください。

# 目次

プロローグ	ある日の夜	1
幼年期・サンタローズ村編		
第1話	武器屋の息子	7
第2話	決意	12
第3話	新たな発見	19
第4話	スキル	26
第5話	想い	34
第6話	特訓	40
第7話	始まりの日	49
幼年期・アルカパ編		
第8話	アルカパの町	59

第9話	いざレヌール城へ	67
第10話	潜入	76
第11話	ピンチ	84
第12話	反省	91
第13話	城の主	102
第14話	お化け退治	111
第15話	夜明け	123
幼少期・妖精の村編		
第16話	違和感	131
第17話	いたずら少女	140
第18話	妖精の村	149
159	第19話 ドワーフの住む洞窟	

第20話

二つ目のスキル

—

170



## プロローグ ある日の夜

大学2年の夏休み、俺はゲームに充実していた。

「ふう〜、クリアしたー！この作品も結構やりつくしたよな〜」

昔懐かしいゲームをやりたい衝動にかられた俺は、押入れから引き出したゲームソフトたちとともに連日プレイに没頭していた。

「次は何にしようかな、と……おー」

うお〜懐かしいな！ドラクエVかあ。

俺、結構このストーリー好きなんだよな〜。

幼少期から青年期にかけて描かれた物語。主人公の壮絶な運命は心にくるものがあるが、彼の周囲に溢れる心優しい人たちには子どもながら感動していたことを覚えてい

る。当時どうにかパパスを助けたくてラインハット城周辺でレベリングを頑張ってたけど、結局負けイベントって知った時はショックだったなあ。

「まあ1、2年前くらいにもプレイしたんだけどな。なぜか何度もやりたくなるんだよ

なく。」

よし！次はコイツで遊ぶか。

俺は実機にソフトを入れドラクエ5に没頭した。

——数日後。

「よっし！クリアした〜〜！」

見事全クリを果たした俺は達成感に浸っていた。

やっぱVはいいな。定期的にやりたくなる。

が、達成感と同時に眠気も襲ってきた。

部屋の時計を見ると夜中の3時を指しており、既に日付は変わっていた。

「ふあ〜……。そろそろ寝るか。」

トイレを済ませた後そのまま布団にダイブ。

うつ伏せの身体を仰向けにしようかと思っただが次第に身体はズシンと重くなり、俺は



そのまま眠りについた。

夢を見た。

目の前に小さな男の子が泣いている。

俺はその場から動くことは出来ず、眺めることしかできない。

何故だろう。男の子には懐かしさを感じる。

それと同時にこの子を守らなければいけないとも感じた。

闇が迫る。

男の子を助けなければと思った。

しかし男の子の姿は闇に飲まれていき辺り一面暗闇の世界となる。

そこに一筋の光が指し込み、俺を包み込んだ。

とても暖かく心地よい、ような……。

そこで夢は終わった。

\*\*\*\*\*

ふああゝゝ、よく寝た。

なんかいつもにも増して気持ちよく眠れた気がする。

今何時だ………つてあれ、身体が思うように動かない。

と、思っていると男と女の顔が覗き込んでくるのが見えた。

「お〜い、パパだぞ〜」

「フフツ、あなたによく似ているわ」

!!?

パパ？何を言ってるんだこの男は。

俺は生粋の日本人なのにこんな外人が父親なもんか。

あれか？そういうのが趣味の人なのか？

…となると、この隣にいる女は母親役といったところか。

「なんなんだよあんた等。ていうかここどこだよ。」

そう言ったつもりだったのだが、あれ？何かがおかしい。

上手く発声？声が出ないことに気が付いた。

どうしたもんかと、ふと寝ている場所から横に顔を向けた。

そこには等身大が見えるタイプの大きなスタンドミラーがあつた……のだが。

(え!!なんだよこれ!!!)

—もしかして俺、赤ん坊になつてる…!?

この時の俺は思いもしなかった。

この世界がドラゴンクエストVだということを……。

## 幼年期・サンタローズ村編

### 第1話 武器屋の息子

転生してから6年の月日が流れた。

最初の頃は何がなんだと戸惑ったはものの、親に連れられ外の景色に触れたときここがドラゴンクエストVの世界であり、しかもサンタローズ村だということを知った。

いや、それでも戸惑うものなのだろうが何故か俺は落ち着きを取り戻していた。

画面越しとはいえ何度も見慣れていた風景だったせいもあるんだろうなあ…。

そして現在の俺自身についていくつか分かったことがある。

まず俺には「レオン」という名がつけられおり、そして武器屋の息子であるという事だ。

普段は家の中で本を読んで過ごしているのだが、たまに父親の手伝いで武器庫の整理や店番をすることがある。

え？外には行かないのかって？

正直、最初は俺もワクワクしていた。

なにせドラクエの世界だ。物珍しいものやモンスター達を見てみたいと高揚していたのだが、直ぐにその考えは改まった。

5歳になった頃、母親から外遊びが解禁され村中を探検したことがあった。

最初こそは「すげえ〜！まんまサンタローズ村だ！」と宿屋に行ったり教会に行ったりとかなり楽しんでいたと思う。

だが、ここは小さな村だ。1日あれば村を隅々歩くことなんて時間が余るほどだ。

正直、何日も同じところを周るだなんてアホらしい。

しかもそんなに物珍しいものなんてなかった。むしろこの村は何もなくて暇だ。

次にモンスターだ。

見てみたいと思ってもこれがまた難しい。

村の入口には門番が常にいるし、洞窟の方も見張りがいる。

どうにか通れないものかと色々試みようとするものの、所詮は子どもの身。門番をかくぐろうとしても直ぐに捕まって引き返させられる。

一度、洞窟の方からスライムが出てきたとの報告があり向かったのだが、既に見張りが撃退した後だったので見られなかったというガツカリした思いでもある。

まあそんなこんなで俺は家で生活することが多い。  
こうして今もボーっと村の様子を見ながら店番をしている。

「ん？」

村の入口から2人の男性が入ってきたようだ。

俺は店のカウンターからじっとその男たちを観察した。

…よく見たら小さな子どももいるな。

1人は体格のいい男。身なりからして戦士だろうか。

もう1人は小太りの中年オヤジってところか？でかでかとした荷物を背負って歩いてくる。

な〜んかどつかで見たことある風貌だなあ…、誰だっけ？

そんなことを考えていると男たちは店にやってきた。

「こんにちは、ボク。お父さんはおられるかな？」

小太りの男が話しかけてきた。

返答しようとした瞬間、後ろから父親が出てきた。

「レオン、そろそろ交代していいぞ……ってお客さんかい？」

「おお！丁度良いところに。初めまして、本日からこの村の一員となります。私サンチヨと申します。どうぞよろしくお願いします。」

ツツ!!?

そうだ！どこかで見たことあると思つたらサンチヨじゃないか！

てか平和ボケして気づかなかつた。そうだよ！パパスとか主人公も当然だけどいるんだよなこの世界には。

…さてよ。ということはサンチヨの隣の男は。

「私はパパスと申す。よろしく頼む。」

やっぱりパパスだった！

もしかして、この子どもが…。

「そしてこつちが息子のアベルだ。」

アベルはペコリとお辞儀をした。



かくして、俺はアベル達との出会いを果たしたのだった。

## 第2話 決意

「おいパパス！何度言ったらわかるんだッ！もうちつと道具を丁寧に扱わんか！」  
「私としては普通に扱ってるだけなのだが。」

ギヤーギヤーと親父とパパスが言い合ってる。

いい加減ケンカやめろよ。

アベルたちがこの村に来てから3カ月ほど経った。

ゲームでもそうだったが、やっぱりパパスは村の皆から慕われる存在になっていた。それも当然だろう。

たまに迷い込んでくるモンスターをいつもパパスが撃退しているのだ。

元々戦える者はいるが、パパスと比べるとなあ。正直安心感が全然違う。

親父だつて認めてるクセに何かにつけてパパスに突っかかりケンカしてる。

「はあ……。」

「レオンにいちちゃん、げんきない？」

アベルが首をかしげてこつちを見ている。

「んなことないぞ、安心しな。」

現在俺は、俺んちの庭でアベルと砂遊び中だ。

…いや俺は遊んでないぞ。

6歳とはいえ精神年齢でいうと20代後半といったところだ。むしろアベルの子守りをしてると思ってもらっていい。

そして1つ分かったことがある。

俺はこつちの世界に来てからアベルたちに出会うまで、現在の時系列がわからなかった。

ゲームではアベルが6歳の時から物語が始まる。

だが目の前にいるアベルの幼さから見ると到底6歳児には見えない。

だからこの前本人に聞いたんだ、…そしたら。

「んー。…みっつ！」

(まさか今が、物語が始まる3年前とはなく。)

正直、こうしてアベルと交流を持ったはものの何をしていいのやらよくわからん。

だってよ……このままコイツが6歳になればいずれ物語は進みだし、ピアンカとレヌール城行って、妖精の村行って、ラインハット城行ったらヘンリー攫われて、パパスが死ん……ッ!!

……そうだよな。

「パパス、死ぬんだよなあ……。」

今はああやってウチの親父とケンカし合ってるけど、ゲマに殺されるんだよな。

そしてアベルは……。

……クソツ、なんだこの気持ち。

画面越しじゃなく実際にコイツ等に出会い触れ合ったせいなのか、考えただけで胸が締め付けられるように苦しい。

何故か、あの日の夜に見た夢がフラッシュバックした。

顔はよく見えなかったが、今では夢の中の男の子はアベル…のような気がする。

うん、そうだよ。親父が目の前で殺されもすれば悲しいに決まってる。

ゲームでは主人公なんて喋らないから本人の感情なんて考えたことがなかった。

だが、ここは現実だ。

アベルはきつと、大泣きしていたに違いない。

父親を殺され、奴隷生活を強いられ、石像にされ、やっと見つけた母親も目の前で殺され…。

青年時代のアベルは我慢していたはずだ、コイツに降りかかる理不尽なこの世の中を。

アベルの砂遊びを見ながらそんなことを考えていた。

\*\*\*\*\*

その夜、俺はベッドの上で考えていた。

「このままだとパパスは確実に死ぬ。」

そしてアベルには、壮絶な災難が降りかかる。

こうして関りを持った以上アイツの辛い顔は見たくないし、パパスだって死なせたくない。

だが、どうすればいい。

パパスにラインハット城に行くことをやめさせるか？

：いや、理由もなしに了承するとは思えない。

アベルをサンタローズ村に残させるか？

：いや、それだとパパスだけでラインハット城に行くことになる。

もしもアベルがいなくてもヘンリー誘拐事件が起きるとするなら、むしろこの村が滅んでしまう。：待てよ、パパスが殺された理由ってアベルの命が危険だったからだろう？  
だったらパパスだけラインハット城へ向かうのはむしろ都合？

だがヘンリーの誘拐に気付かなかったらどうなる？

タイミング的にも訪問していたパパスに疑いの目はかかる。

クソツ…考えれば考えるほど頭が痛くなる。

アベルたちの運命を変えられるとしたら、可能性は俺だけなのに。  
せめて、俺が戦うことが出来れば………ん？

「…そうだよ。俺が戦えば…。」

俺が……アベルとパパスを守れば！

「でも、出来るのか？」

正直怖い。

なにせ俺は平和な世界で暮らしてきたただの大学生だったんだ。

ここに来て、ただただ何もせず暮らしてきただけだ。

モンスターだって、スライムですらまだ戦ったことがない。

でも、俺が――。

「俺が、運命を変えて見せるッ！」

\*\*\*\*\*

次の日。

「旦那様、お客様ですよ。」

「む？誰か来たのか……ってレオン君か、どうした？」

「パパスさん。俺に剣を教えてください！」



## 第3話 新たな発見

「踏み込みが甘いぞレオン！もう一度だッ。」

「……はぁ……はぁ……、うつす！」

パパスに剣を教わり始めて2週間ほど経過した。

最初は「まだ子どもなのだから」という理由で断られたのだが、パパスの雄姿に憧れてくなどと褒めちぎったら少々照れながらも了承はしてくれた。

といっても毎日稽古という訳ではない。

パパスの都合がつく時に剣を教えてもらっている。

そして今はパパスと剣を交えている最中なのだが…。

「よし、今日はここまでにしよう。」

「ぜえ……ぜえ……ッ、わ……わかりました。」

き……きついッ！

正直ここまでだとは思わなかった。

よくアニメや漫画の奴らはこんな重てえもん振り回せるよな。

パパスとの稽古は銅の剣を使用している。

パパス曰く「木刀もいいが、実践のために今から慣れておいた方がいいだろう」とのこと。

ぐったりと地面に寝転ぶ俺の元にアベルが近寄る。

「レオンにいちゃん、だいじょうぶう？」

ぐッ……アベルたちを守るためにやってることだ。

弱音なんて見せらんねえ。

「ヘッ、心配すんな！こんなんへっちやらさ！」

本音を言うと、もう無理です。

「はっはっは！まだ子どもなのだから無理もないぞ。だが、何度か稽古をしているがレオンの成長速度はあまり早い方ではないな。」

う……うるせえ。どうせ俺は温室育ちの甘ちゃんですよ。

剣を杖代わりにして立ち上がる。

「だがどうだ、少しはレベルも上がったのではないのか？そろそろステータスを確認してもいいだろう。」

ああ、ステータスね。

わかりま……………んんツ!!?

え…今、何て言った？

ステータス？

え、あるの？

「ちよ！ちよつと待ってください！…ステータスってものがあるんですか？」

するとパパスは目を丸くして、

「なんだレオン、知らなかったのか？てつきり知ってるものだ。」

はああああ!!?初耳だよ!!なんだよそれ!

今まで戦闘なんかしてこなかったとはいえ、そもそもステータスの概念が存在するかもだなんて考えたことなかった。

ていうか、こつちの世界に来てから使ってる人なんて見たことないし。

……まあ、今更嘆いたところでどうしようもない。

それよりもステータスの確認方法だ。

「パパスさん。ステータスってどうやって確認するの?」

「『ステータスオープン』と言えば確認できるぞ。」

な、なるほど。

じゃあさっそく…。

「『ステータスオープン!』」

瞬間、俺の目の前にウィンドウ画面が出現した。

ほ……ホントにでた。

えーつと…。

名前：レオン 性別：男 レベル：2

職業：村人

HP：23／28

MP：30／30

攻撃力：22

守備力：10

呪文：なし

スキル：カウンター

お、レベルが2だ。

いつかの稽古中にながったのだろうか。

てか、「ちから」や「すばやさ」などのポイント値は存在しないんだな。

……………。

あれ？

「スキル？」

なんだこれ。

少なくとも、ドラクエ5の世界にスキルという概念なんてないはずだ。  
どういうことだ？

「すみませんパパスさん。スキルって言葉に心当たりありますか？」  
「スキル？はて、何のことだ？」

パパスも知らない情報……てことは！

「い、いえッ…何でもありません。」

もしかしたら、いけるかもしれない。

俺はある可能性を感じた。

これはアベルやパパスを唯一救える突破口になると。

……これはッ！

「この世界で俺だけに与えられた、ユニークスキル……？」

## 第4話 スキル

ステータスの存在を知った次の日、俺は自分のスキルについて考察していた。

現在。パパスはアルカパに用があるとのこと。で不在だ。

アベルもパパスについて行ったようだ。

なので庭で剣の自主練をしていた。

といってもまだ剣自体に慣れていないので素振りくらいしかすることはないが。

素振りも一段落し俺はステータスを眺めていた。

「そういえば職業『村人』ってあるけど、俺強くなれんのかな…。」

確かゲームではアベルのやつ『パパスのむすこ』ってなってたよな。

しかも旅していくうちに結構変わってたけど、職業ってそんなコロコロ変わるものなのか？



まあ現時点ではそこまで攻撃などの数値自体は問題視していない。レベルが上がればそれに伴うだろうと楽観視していた。

問題は…。

「この『カウンター』ってスキルだよなー。」

『カウンター』というスキルがどういったものなのかを確認したいのだが、いかんせん発動の仕方がわからない。

呪文は名前を口にすれば発動されることはわかっている。

以前アベルが転んで怪我したときに、パパスが「ホイミ」と唱えて治したのを目にしたから。

だから同じ要領で素振りの途中「カウンターッ！」と声に出してみたはものの、特に変わったことはなかった。

スキルは呪文と違って何か条件が揃わないと発動しない……とか？

意味を考えてみるか。

カウンターという言葉からして「反撃」をするってことだよな。

他者から攻撃があるからこそ逆に攻撃をかける——これが『反撃する』ということだ。

もしかして、他者からの攻撃があつて初めて発動するのか？  
んん………気になる。

「パパスが帰ってきたら試してみるか。」

\*\*\*\*\*

三日後、パパスとアベルが村に帰ってきた。

「さあ、レオン。始めよう。」

「あ、始める前に一ついいですか？」

「む？なんだ？」

これまでの稽古は俺がひたすら打ち込み、それをパパスが防ぎながら太刀筋などの問題点を指摘するという流れだった。

基礎も大事だ。だが今は俺自身のスキルを把握することを優先すべきだと思った。

俺の仮説が正しいかどうかはわからないが、俺はパパスからの攻撃をもらう必要がある。

「俺が打ち込んでいる最中に、たまに攻撃を加えてもらえませんか？」

「なに？だがレオンはまだ剣に慣れていない。増して攻撃を受け止めるほどの体も出ていないのだぞ？」

「それでも…お願いします！」

「ふむ…。そこまで言うのならいいだろう。だが、万が一のことを考えて私は木刀を使用しよう。」

パパスとの稽古が始まった。

攻撃を打ち込む中、パパスからの攻撃が迫った。

確かゲームでのパパスの攻撃力は150近くあったことを覚えている。

その上「ちから」のポイントも100を超えていた気がする。

本気で攻撃してきていないとはいえ、正面から受けたらどうなるのか気になる。

ええい！ものは試しだ！

俺は剣を横にし防御の構えを取る……が。

カアンツツ

!!!!!!

上から斬りつけきた。パパスの攻撃はそのまま俺の剣に当たった。

しかし想像以上の衝撃により俺の手から剣は抜け、そのまま地面に叩きつけられた。

(いッツてえ〜〜!!!!)

何だよこの威力!?マジで痛えよ!

俺はあまりの痛みによりうずくまる。

「レ、レオン!?済まなかった、少し力が強かったようだな。」

パパスが心配そうに近寄る。

「だ、大丈夫です！それより…もう一度お願いします。」

「うーむ、しかし…。」

「お願いします！あと一回だけでいいんで！」

そういうとパパスは少し悩んでいるようだったが、俺の意を汲んでくれ「わかった」と言った。

再度、稽古が始まる。

何回か攻撃を打ち込んだところでパパスからの攻撃が迫る。

(今度はこっちも攻撃だ！)

迫りくる攻撃に合わせて俺も剣を振る。

そして、パパスと俺の剣が交わろうとした瞬間――。

(……だッ!!!)

タイミングを見計らい俺は声に出して叫んだ。

『カウンター』 ツツ  
!!!!

カア  
ンツツ  
!!!!!!!

パパスの木刀が宙を舞い、そのままカランと地面に落ちた。

(で……できた!!)

「む?!レオン、いつの間にここまで成長したのだ!中々やるではないか。」  
ワツハツハと愉快的な笑いをしながら。パパスは俺を褒め称えた。

一か八かだったが思惑通りに成功してよかった。

ガクン——。

ツ……て、あれ？なんか、一気に体が…重く………。

ドサリ。

「どうした!?!レオン！レオンツ!!」

俺……どうしちまったんだ…？

パパスの呼びかけに応じることが出来ず、俺はそのまま意識を失った。

## 第5話 想い

「レオン、気が付いたか！」

「…あれ？俺どうなったんだっけ？」

気づけば俺は自宅のベッドに横になっていた。

そしてパパスの顔が見え、心配そうにこちらを見ている。

「パパスさん…。」

「大丈夫か？稽古中、急に倒れたんだが覚えているか？」

そういえば稽古してたんだっけ。

パパスの木刀を吹っ飛ばした後、急に体が重くなって倒れたんだっけな。

「ふむ、特に怪我はないようだな。レオンよ、稽古中呪文を使ったか？」

え、呪文？

「いえ…何ですか？」

「いや、こうしてレオンの様子を見ていたのだが、どうにも『MP枯渇状態』に酷似しているな…。ステータスを確認してもいいか？」

MP枯渇？初めて聞く言葉だ。



「わ、わかりました。」

俺はステータスを表示しパパスに見せた。

「うむ。やはりMPが0になっているな。…しかし、レオンはまだ呪文を覚えていないな。なぜ枯渴したのだろうか。」

MPが0…。

もしかして、スキルの影響か？

……………あッ!!

…マズいッ。スキルの欄を見られる。

俺はこのスキルをなんとなく隠したかった。

何せこの世界ではイレギュラーな力だ。

もし周囲にバレでもしたらどのようなリスクがあるのか想像がつかない。

俺は固唾を飲んでパパスの様子を伺った。

しかしパパスは何事もなかったかのようにステータスを見るのをやめ席を立った。

「ふむ…。私もよくは分からぬが、もしかしたら呪文が発現する兆候なのかもしれない。まあ今はゆっくり休むといい。それでは私は失礼するよ。」

ボタンと部屋のドアが閉まる。

…あれ？

スキルの欄を見逃した？

いや、有り得ないだろう。

パパスは呪文の有無を確認した。

スキルは呪文のすぐ下に記載されているから目には入るはずだ。

「もしかしてこれ、俺しか見えない感じ？」

\*\*\*\*\*

——翌日。

「みてー！むしー！」

「うおう!?…でけーな。」

今日はパパスとサンチヨが外出しているため絶賛アベルのお守り中である。

子どもは元気だなー。

俺にもあんな時代があったもんだとしみじみと感じる。  
まあ今の俺も子どもだけだ。

はしゃぐアベルを見ながら昨日のことについて考える。

(MP 枯渇状態…。そして、なぜMPが0になったか。)

恐らくスキルだ。

本来この世界には存在しない力ではあるけど、発動条件に加えMPを消費することでスキルを使用すること出来るのだと思う。

俺の最大MPは30だ。

それが0になった…。つまり『カウンター』を使用するにはMP消費量30が必要になる。

「…めっちゃ消費するじゃん。」

だが昨日の様子からして自分と相手との戦力差がかけ離れていたとしてもそれに対抗できる唯一の切り札にもなる。

だが俺のMP量からして現状は使用することは不可ということがわかった。

スキルの練習をしたくても倒れてしまえば元も子もない。

「当面の課題はMP量の増加ってところか。」

はやりレベルを上げないことには話にならないようだ。

遊んでいたアベルがこつちに来た。

そして座っている俺の横にトテンと腰かけた。

「えへへっ」

こうして一緒に遊んでいるせいかわアベルは結構俺に懐いていた。

「どした？なんか良いことでもあったか？」

んーん、とアベルは首を横に振った。

「さいきんね、おとうさん げんきなんだ！」

「いっつも元氣じゃね？」

「レオンにいちちゃんが げんきにした！」

ん？どゆこと？

「おとうさんとね いろんなところ あるいてたときは ちよつとげんきなかった。でも

レオンにいちちゃんと ケーコしてると わらってる！」

そうなのか？うーん、俺にはよくわからんな。

でも…。

ニコツ！

こんな眩しい笑顔してコイツが言うんだ。きつとそうなんだろう。

コイツの笑顔、失わせたくないな…。  
守る。

大切なものを奪わせはしない。

(強くなってみせるッ。)

## 第6話 特訓

アベルたちがこの村に来てから約1年。

俺は7歳、アベルは4歳になっていた。

そして今、サンタローズ村入口にいるのだが…。

「やだあ！レオンにいちやんと いっしょがいい！」

「ワツハツハ！アベルも随分レオンに懐いたもんだ。こうしてみるとまるで兄弟のよう  
だ。」

「坊ちゃん、レオン君も困ってしまいますよ。」

今日からパパスとアベルはしばらく村を離れるらしい。

具体的には言われなかったが何かを探す旅を再開するらしい。

まあ母親のマーサってことを俺は知ってるが。

俺とサンチョは見送りに来ているのだがアベルの奴が俺にくつついて駄々をこねて  
る。

ハハハ、兄冥利に尽きるってもんだ。でもそろそろ離そうねー。

「困ったなあ。」

グズグズ泣いてるアベルの肩に手を置きしやがみ込む。

「グスツ……?」

「いいかアベル。これでもう会えないって訳じゃないんだ。でも泣いてワガママ言つてるとこれで最後になつちやうかもしれないぞ。それでもいいのか?」

アベルは涙を拭った。

「…いやだ。」

「だろ?だから兄ちゃんと約束しよう。強い男になるって。男はいつか闘わないといけないときがくるんだ。アベルが泣きべそかくだけの弱い男になったら兄ちゃん悲しいぞ〜!」

あえてアベルを奮い立たせるよう言葉を選ぶ。

「だから強くなつて帰ってこい。兄ちゃんももつともつと強くなるから。その時は一緒に稽古しようぜ。」

アベルの目の色が変わった。

「…うん!ぼく つよくなる!」

パパス達の姿が小さくなつていく。

「寂しくなりますねえ。」

「そういうならサンチヨさんも行けばよかつたのに。」

「いえ、私は旦那様達を支える側になると決めたので。いつでも迎えられるよう我が家

をお守りせねば！」

「ハハハ、そうだね。」

サンチヨが家に戻つていく。

さてと。

「んじゃ、始めますか。」

\*\*\*\*\*

「お、武器屋の坊主じゃないか。」



「こんにちは。」

「パパスさんから言われた時は驚いたが、ここで稽古の実践とはな。あまり奥深くには行くなよ。」

「了解です。」

俺はパパスが村を離れる数日前にある頼みごとをしていた。

それはサンタローズ洞窟でのモンスターとの戦闘だ。

パパスがいなくなると稽古する相手がいなくなことを俺は懸念していた。

加えて稽古だけではレベルが途中から上がらなくなった。

そこでモンスターだ。

稽古の実践を行いたいと懇願したので。

初めは悩んでいる様子だったが「今のレオンなら大丈夫であろう」と以外にもあつさり返答を貰えた。

この旨を親父にも伝えると「家においても体がなまるだろ」という理由で了承。ちよくちよく俺とパパスの稽古を見ていた上での判断なのか。

何はともあれ正当な権利のもとモンスターと対峙できるんだ。

最大限利用させてもらう。

「つしや、行くか。」

洞窟に入つて少し進む。

おっと、さつそくお出ました。

「スライムか」

間近で見るのは初めてだがゲームのまんまのスライムだな。

恐怖感はあまり感じない。むしろ愛らしい。

スライムがこつちに気づいた。

「先手必勝！」

間合いを詰め斬りつける。

結果、あっさりスライムは真つ二つになり消滅した。

「…ふう。」

無事初戦闘を終えた。

正直緊張していたがこれならなんとかかなりそうだ。

「もう少し奥に進むか。」

「クツ…ちよこまかと！」

現在ドラキーと交戦中。

以外とすばしっこく、剣を振るも空振りしてしまう。

「グハッ！」

いってえ〜。

さつきからこれだ。俺が空振ればその隙にドラキーが体当たりをかましてくる。

なんとか壁際に追い詰めたもののどうするか………なら。

「ヘッ。ならこれはどうだ！」

俺は足元に転がっている石をドラキーの右側に投げる。

それをドラキーは左へよける…が。

「そうくると思ったよ！」

ドラキーのよけた先に剣を振り下ろし、見事クリーンヒット。

「あ、あ〜、つつかれた…。」

集中力が解け、どっと疲れが襲い掛かる。

ドラキー相手にこんなに苦戦するとは。ゲームみたいにサクツとはいかないなあ。かれこれ洞窟に潜って30分ほどだろうか。

あまり時間は経っていないし、数もそこまで倒していない。

だが、子どもの体のせいか凄く疲れた。

「初日はこんなもんでいいか。そろそろ引き上げ…ッ」

何か…いる。

気配に気づき後ろを振り返ると、武器を振りかぶったおおきづちがそこにいた。

(ヤバッ)

とつきに武器を取ったときにはもう口にしていた。

「カウンター!」

カンツ!!!

おおきづちのもつ武器が吹っ飛び、俺はすかさず斬り込む。

急所に入ったようで、なんとかおおきづちを倒すことができた。

「ハア…ハア…。」

あ…焦った。

つい気を許したせいで全く気配に気づかなかった。

今回は何とかなかったが次からは気を付けよう…。

「いよいよもう帰らないとな。」

切り札を使ってしまった。

そう、俺はまだ1回しかカウンターを使うことが出来ない。

---

名前：レオン 性別：男 レベル：5

職業：村人

HP：15／34

MP：24／54

攻撃力：23

守備力：13

呪文：なし

スキル：カウンター

---

パスとの稽古の成果もあってレベルは5まで上がっていた。

MPの伸びしろはかなり良い。が、それでもスキル2回分にも満たない。まあMP枯渇状態に陥ることがないのは大きいかな。

村に戻りながら考える。

ゲーム通りにいけば次アベルたちが帰ってくるのは2年後。つまりアベルが6歳の年に物語が始まる。

それまでに俺はこのサンタローズ洞窟で出来る限り力をつける必要がある。

やっとまともな経験値が入るとはいえ所詮微々たるものだ。

どこまでレベルをあげられるか：そして職業：村人の成長率はいかほどなのか。

期限は2年。

分らないことだらけだが、とことんやってやろうじゃないか。

## 第7話 始まりの日

「よう坊主、もう帰りか。」

「おっちゃん。今日は軽くって思ってたんで。」

「そうか。にしてももう2年くらいか？これではどちらが警備員か分からんな。」

「ハハ、やめてくださいよ。」

アベルたちが村を離れかれこれ2年が経ち、俺は9歳になっていた。

今はサンタローズ洞窟での特訓を終え帰路についているところだ。

この2年で大分モンスターとの戦闘にも慣れた。

と言ってもこここのモンスター限定だけだな。

だが爆発的に成長しているかというところでもない。

これが今のステータスだ。

---

名前：レオン 性別：男 レベル：12

職業：村人

HP : 48 / 48

MP : 110 / 110

攻撃力 : 32

守備力 : 20

呪文 : なし

スキル : カウンター

---

レベルは12まで上がった。

あ、今年で7しか上がってないのかよとか思っただろ。

これでも結構頑張ってたんだよ。

だってゲームみたいに数分で決着つくような戦闘なんてこの世界には存在しない。

加えて経験値だって少ない。

だがHPを損なわないようにいつだって真剣勝負だ。ダメージ痛いし。下手すりゃHP0になるよ。嫌だよ。そこまでボコされたくねえよ。ダメージ痛いし！

ステータスはMPの成長量が凄い。それ以外は……あれだけど。

まあスキル『カウンター』に30も持つてかれるから大助かりだ。呪文はまだないけ



ど。

てか、スキルの存在を知ってからと言うものの未だに『カウンター』1つしかない。普通こういうのって何個も発現するもんじゃないのだろうか。

もしかしてずっと1つだけ？

レベルだつて2桁いったのにな？

…もう少し様子見だな。

あ、そうそうモンスターからお金は落ちなかつたよ。

となると武器や道具はどうやって買えばいいの？

大人になったらどうやって宿に泊まればいいの？

てかお金稼ぐ手段ってあるの？

ボク9さい！わかんない！

なんてくだらない事考えてたら家に着いた。

あれ？なんか村の入口が騒がしいな。

人が集まってる。

その中の1人が大きな声を上げた。

「<sup>パ</sup>パスさん、あんた生きてたんだね！」

お!!

帰ってきたのか。

遠目から見えるがアベルのやつ、少しはデカくなつたな。

「なに!? パパスだと!」

うおつ! 勢い良く玄関から出てきたな親父。

パパスとアベルがこっちへ歩いてきた。

「よう、パパス! やつと帰ってきたな!」

「やあ、久しいな。」

「あんたとはケンカばかりしてたが、いざいなくなると物足りないつたらありやしねえ。」

「ワツハツハ! 少しは落ち着けて良かったのではないか?」

「ヘッ! 相変わらず減らず口だな。まあ、またつもる話でも聞かせてくれよ。」

親父も素直じゃねえな。

また会えて嬉しいの一言くらい言えればいいのに。

何だかんだ言つて結構親父とパパス仲良かったしな。

「レオン兄ちゃん！」

「うおっと！」

アベルが抱きついてきた。

「よう！元気だったか？」

「うん！元気だよ！でもレオン兄ちゃんに会えなくてちよつと寂しかった！」

「ハハハ、そつか！じゃあまた一緒に遊ばないとな。」

「やったー！へへっ！」

まったく、可愛い奴だな。

でもこうしてまた元気な姿を見れて正直ホツとした。

よし、コイツには今度俺直伝光る泥だんごの作り方を教えてやろう。

こうしてアベルと再会を果たした。

それと同時に今日が始まりの日ということを認識した。

\*\*\*\*\*

その夜、家族と晩ご飯を食べていた。

「何しけた面してんだレオン。」

「え、あーいや別に。」

「どうしたの？ 具合でも悪いの？」

母さんが心配そうな目でこちらを見ている。

「全然！ 大丈夫だよ。」

俺は考えていた。

アベルが6歳になった今、物語が始まるという事を。

そして悲劇を回避するためには俺自身が2人の旅に同行する必要があるという事を。

そのためにはこの村を、この家を離れることになるのだが…。

(賛成してくれるかな。)

俺は意を決して口を開いた。

「あのさ、話があるんだけど…」

すると親父が話を遮った。

「まあ待てレオン。大事な話は飯食ってからでもいいんじゃないのか。」

うっ、何でわかるんだよ。変に勘がいいんだよな親父。

とりあえず今はご飯を食べることにしよう。

母さんが食器を片して台所から居間に戻ってきた。

親父が腰かけてる隣の席に腰を下ろし、俺に目を向けた。

「で、どうしたのレオン。」

「あー、あのさ。俺昔から強くなりたくてパパスさんに剣教えてもらったたじやん？それでここ2年は洞窟でモンスターと戦ったりしてさ、今じゃ洞窟内だと敵なしなんだ。でも思ったんだ、もつと強くなりたいて。村の外には俺の知らない世界や強いモンスターがいっぱいいるんだろ？俺、見てみたい。そして旅してみたい。だから今日パパスさんが村に戻ってきた時頼んだんだ。パパスさんの旅に同行したいって。そしたら、親父たちに了承もらったら同行してもいいって言ったんだ。だからさ頼むよ。俺に、冒険に出る許しをください！」

何となくそれっぽい理由を並べてみたんだがどうだ？

期限付きでもいいからパパスとアベルに同行さえ出来ればこっちのもんなのだが。

「ふん。そんなことだろうと思つたよ。いいぞ、行つてこい。」  
て、あれ？！意外とあっさり。

「お母さんは少し心配だけど、パパスさんと一緒なら大丈夫よね。気を付けてね。」  
えー。母さんもそんな感じ？

「いいの？なんで、そんな…。」

「普段のお前を見てると想像くらいつく。お前ももう9つだ。いつまでも村にいても仕方ないだろ。」

「私たちのことは気にしないでいつてらっしゃい。でもたまには顔を見せに帰ってきてね。」

ハハ、この両親はホント自由というか何というか。

でも信頼してくれているのは嬉しかった。

「ありがとう。親父、母さん。」

\*\*\*\*\*

「はあ…まさか本当に了承をもらうとはな。」

「へへッ、レオン兄ちゃんといっしょー！」

次の日、俺はパパスたちの家の前にいた。

旅の了承をもらったことを伝えるためだ。

ていうか。パパスのやつ、俺の両親から許可が下りないだろうと踏んで提案してきたのか。

「まあ決まったものはしょうがない。ところでレオンは隣町のアルカパに行ったことあるか？」

「いや、ないけど。」

「そこに住むダンカンという知り合いがいてな。その女将と娘をこれから送っていくのだが折角だ、同行しないか？」

「ぜ、是非行きたいです！」

よし！正直アルカパの町自体興味があつて行きたかった。

だがそれよりもレヌール城イベントに同行できるのは嬉しい。

ちなみにアベルの洞窟イベントはスルーした。

まあコイツなら1人でも大丈夫だろうと思つてたしな。

「よし、それではそろそろ行くか。2人を呼んでくる。」

そういえば、何気にビアンカとは初対面だな。

確かゲームでは美人設定だっけ？

ふむ……期待。

扉が開いた。

女将さんとビアンカが出てきた。

おお…やっぱりビアンカ可愛いな。

「では、行くとしよう。」

——物語が始まる。



## 幼年期・アルカパ編

### 第8話 アルカパの町

「これはパパス殿。アルカパへようこそ。」

「やあ、ご苦労さん。」

アルカパの町に到着した。

うわー！ やっぱサンタローズ村よりも町って感じだな。でっけー！

あとで色々見て回ろつと。

宿屋に入りカウンタールから見て右手にある部屋へと進む。

奥のベッドにはダンカンが寝ていたのだが俺たちに気づいたのか起き上がった。

「おお、これはパパスさん。わざわざすまないねえ。」

「ちよつとアナタ！無理してはダメよ。」

「寝たままで結構ですよ。見舞いに来ただけです。」

女将さんとパパスはダンカンの側へ行き話をしている。

「レオン、アベル。もし退屈ならその辺を散歩してきてもいいぞ。」

「じゃあ、ちよつと出てきますね。」

パパスに返事をし部屋を出ようとする。

「ボクもレオン兄ちゃんについてく〜！」

「んじゃ一緒に行くか。」

部屋から出ようとしたがビアンカがこちらを見ていることに気が付いた。

えーと、誘った方がいいかな？

「あー、キミも一緒に来る？」

ビアンカは少しびっくりした様子を見せたが直ぐに目を反らした。

「…いや、私はいいわ。」

あれ？ゲームだとして来るはずなんだが。

まあ本人がいいと言うんだ。ここで無理に連れてくこともないだろう。

俺とアベルは部屋を後にした。

「お店がいっぱいだ〜！」

「時間もあるしゆつくりまわっていいこうぜ。」

アベルと一緒に店をまわっていく。

敷地面積で言えばサンタローズ村よりも少し小さいがモノが多い分アルカパの方が見ていて楽しい。

「おっちゃん、これくれ！」

「はいよ、毎度あり。」

実はアルカパに行く前に両親から少しお金をもらっていた。

好きなもの買っていいぞといわれたのでありがたく使わせてもらう。

ちなみに今は道具屋にきており、やくそうやキメラの翼を買っていた。

これもレヌール城へ向かうことを考慮してのことだ。

「それと、ほらアベル。」

「やったー！ありがとー！」

アベルにクツキーを手渡した。

まさか道具屋にお菓子や軽食も売ってるとはな。戦闘だけ考えるのではなく、観光も楽しまないところはもったいない。

来た道を引き返していると木の後ろから誰かがこちらを見ているのがわかった。

あれは…。

「あー！ビアンカだ！」

アベルが声をあげる。

ビアンカもビクツと焦った様子だった。

ハハ、やっぱり子どもだな。一緒に来たかっただみだ。

俺はビアンカに近づきクツキーの入った袋を差し出した。

「食うか？」

ビアンカはじつとクツキーを見つめ少し照れた様子でクツキーを受け取った。

「あ…ありがと。」

俺達は木陰に腰かけ少し休んでいた。

「俺はレオン。アベルと同じ村に住んでるんだ。よろしく！」

「私はビアンカ。よろしくね、レオン！」

なんだ、結構気さくに話してくれるじゃないか。

「さつき、なんで隠れてこっち見てたんだ？来たいなら一緒に来ればよかったじゃん。」

「そ、それは……レオンのこと知らなかったし、ちよつと恥ずかしかっただけよー！  
んなムキになつて言わんでも。

でも実際村にいたときもすれ違いもしなかったし、会うタイミングがなかったのだからしょうがないか。

「ビアンカ照れてる〜！」

「照れてないわよー！」

2人ともワーワー言い合つてる。

うへー、なんだか子守りが2倍になった感じがして兄ちゃんちよつと辛いわー。

「それじゃ、ここからは私が2人を案内してあげるわ！ついてきてー！」

\*\*\*\*\*

ビアンカに色々案内してもらい日も傾いてきた。

「そろそろ宿に戻るか？」

「そうね……あら？」

ビアンカが何かに気づいた。

川を挟んだ橋を越えたところで2人の男の子が遊んでいる。

「いや、あれは。

(ベビーパンサーか。)

そういえばコイツ等がいたな。

あれだ。あまりにもアルカパの町が楽しすぎてこのイベントを忘れていた訳じゃない。うん。全然。決して。

ビアンカが駆け寄っていく。

「ちよつとアナタたち！やめなさいよ！その子が可哀想でしょ！」

「何だよ、いーだろ別に！この猫、変わった声で鳴くからおもしろーぜ！」

「それでもダメよ！その子を渡しなさい！」

面白がる男の子に対してビアンカが怒気を含んだ声をあげる。

「この猫渡せだつてよ。どうする？」

「そうだなー。別にあけてもいいけどさ……そうだ！レヌール城のオバケを退治してき  
たなら考えてもいいぜ！」

「いいわよ。やってやろうじゃないの！約束よ！」

フンと怒った表情でビアンカは踵を返す。

「待ってよビアンカ〜！」

アベルがビアンカの後を追う。

ビアンカつて結構感情のままに動くんだな。

俺も2人の後を追った。

ビアンカとアベルは宿の前まで戻っていた。

そしてビアンカは声を荒げた。

「アベル！レオン！今夜レヌール城に行くわよ！」

「え〜！ボクたちだけで〜！」

「何よアベル！それでも男の子なの！」

ギヤーギヤーとビアンカが騒ぎアベルに怒りを向ける。

アベル、災難な子。助け船を出すか。

「まあまあビアンカ落ち着けよ。行くにしてもまず準備が必要なんじゃないか？」

「うっ…まあそうね。」

色々言い聞かせ、徐々にビアンカの興奮は収まった。

そして俺たち3人はレヌール城に行くまでの段取りなどを話し合った。

「うしつ、まあこんなところだろ。」

「うん！」

「ええ、それじゃ今夜決行よ。」

さあさあ本格的なダンジョンは初めてだが…。

(俺の力がどこまで通用するか試してやる。)



## 第9話 いざレヌール城へ

「アベル、レオン 起きて……。二人とも……」

…んーん、誰だよ眠いなあ。

少し目を開くとまだ外は真つ暗だった。

んじや2度寝といきますか、おやすみ。

「て、レオンッ！なんでまた寝るのよ」

今度はしつかり目を開く。

そこには腕を組んで仁王立ちしているビアンカの姿が見えた。

「アベルは起きたつていうのにアンタは…」

やれやれと呆れ顔のビアンカ。

あーそうだった、レヌール城へお化け退治しに行くんだったね。

意外とベッドがふかふかで気持ち良かったもんでつい。

ちなみにレヌール城へ行くにはアルカパに滞在する必要があるのだが「もう少しこの町を見てみたい」という旨をパパスに伝えると「晩だけ泊まることになった。」

「ごめんごめん。じゃあ行くかうか」

俺はベッドの下からまとめた荷物を引っ張り出し背負った。

「準備できたわね。じゃあ行くわよ」

こつそりと部屋を抜け出しそのまま一階へ。

そして正面玄関を開き外へ出た。

「へへ、なんかワクワクするね！」

「そうね！わたしもなんだか楽しい気分だわ！」

「やっぱいけないことする時つてのはスリルがあつて良いもんだな」

「レオン、なんか悪人みたいな顔してるわよ」

ゲヘゲへと笑っているとビアンカから指摘を受けた。

笑つてただけなのに悪人つてひどくない。べ、別に普段から悪さなんてしてないよ。

…ホントだよ？

「レオン兄ちゃん、あそこお店かなあ？」

アベルは灯りのある方へと指をさして聞いてきた。

あーあれはBARだな。

今は深夜前だから丁度盛り上がる時間帯なんだろう。店の方から大きな笑い声が聞

「ええ。

「あそこはお酒を飲むところらしいわよ。お父さんも偶に行ってるわ」

「ま、俺たちにはまだ早いつてことだ」

へえくとアベルは納得したようだ。

「お酒のどこがいいんだかわたしにはさっぱりだわ」

「大人には大人の楽しさつてのがあるんだらうよ」

「そういうものかしら。：でも、そんなに楽しいのなら大きくなったら行ってみたいわ。

そうだ！アベルにレオン、大人になったら3人でここに来ようよ！」

「ぼく行きたーい！」

「そうだな、いつか3人で行こうぜ」

「エヘッ、約束だからね！」

\*\*\*\*\*

「にしてもホントにザル警備だな」

「言っただでしょ？いっつもあのおじさん夜になると寝てるのよ」

「ビアンカ、あのおじさんが町を守ってるの？」

「そうよ……まあちよつと不安にはなるよね」

現在俺たちはアルカパを出てレヌール城へ向かい始めたところだ。

無事外に出れたのはいいがビアンカは警備兵に対して少し呆れた様子だ。

万が一にもモンスターが町に入り込んだら大変なのだからしつかり仕事して欲しい

もんだ。幸いにも町周辺にはモンスターはいないようなので安心だ。

「町にモンスターが来たことはあるのか？」

「あるわよ。でも最近はそんな報告は聞かないわね」

「ぼくたちの村にも来るよねー！」

3人で雑談しながら歩いていく。

しばらく進んでいると森が見えてきそのまま中へと入っていく。

「うへ〜こりや不気味だな」

「なんか出そうだねー」

「うっ…正直私もちよつと苦手」

風が吹いているようには感じないがザワザワと木々が揺れている。

月明かりのおかげで辛うじて4、5メートル先は見えるが森の奥を見ると驚くほど

真つ暗で文字通り闇に飲み込まれてしまいそうだ。

気づけば俺の左脇腹にアベルが、右脇腹にビアンカがくつついていた。

「…おい、お前たち何してる」

「だって怖いもん！」

「わ、わたしはべ、別に！でもちよつとだけ、ちよーつとだけ怖いからわたしの盾になつてちようだいッ！」

お、お前らな…俺だって怖えーんだぞ！

アベルは正直で良いとして、ビアンカさん？あなたまさか俺が防具にでも見えてるの？肉壁なんて絶対にお断りですわよ。

ガサツ…。

「わっ！」

「ひゃうっ!？」

!?

茂みだろうか。進行方向から草木が揺れる音がした。

そして姿を現したのは――。

(……おおねずみ?)

しかも3体。どうやらこちらの様子に気づいていたみたいだ。

やばいッ、こつちに飛びつく勢いだ。

「お前たち！戦闘態勢をとれ！」

2人とも状況を理解しキツと表情が変わる。

まったく……さつきまでの様子はどこへやら。勇ましいいたらありやしない。

「おおねずみ3体だ！各自1匹ずつ相手しろ！」

「うん！」

「了解！」

俺は剣を抜きそのまま中央のおおねずみへと斬りかかる。

しかし剣は空を切り、そのまま地面へと振り下ろされる。

「どこいった!？」

左右見たが姿を確認できない。が、次の瞬間――。

ドゴツ!!

俺の身体は横に吹っ飛び背中から木にぶつかる。

(グッ……背中痛ッ！それより……)

頭にズキツと痛みが走る。

どうやらおおねずみはジャンプし剣をかわした後、俺の側頭部へと蹴りを一発ぶち込

んだようだ。

倒れた俺の側におおねずみは近寄り、まるで嘲笑うかのように俺を見下ろしている。

「クソツ!!」

剣を横に一振りするがおおねずみは後ろ飛びでかわす。

俺は剣を支えに立ち上がる。

スピードは相手の方が上…。どうすれば剣が当たる。

(じゃあこれならどうだ)

俺はおおねずみへと間合いを詰め何度か斬りつける。

だが相手はピョンピョンと横へ後ろへと逃げる。

合間に数発蹴りを受ける。

クソツ、もう一度来い!

そして次の一振りでおおねずみが上へとジャンプし剣を交わした。

(ここだツ!)

おおねずみの蹴りが入る、かと思いきや――。

ブシュツ!!

おおねずみの横腹にはナイフが突き刺さる。

「誰が武器は一本だって言ったよ!!」

そう、実は武器屋でくだものナイフを1本購入していた。

ゲームでは1つしか装備できないがここは現実。別に両手に剣を持つことだって可能であることは実家にある武器で把握済みだ。

だから予備の武器として腰にくだものナイフを下げているのだ。

おおねずみが上へと飛んだ瞬間、俺は剣を持っていない片腕でナイフを取り宙にいろおおねずみへと突き刺した。

いくらスピードに自信があるといっても空中では逃げようがないからな。

ナイフを突き刺されたおおねずみはパニックし、地面でのたうち回る。

その隙に剣を握り直し振り上げ、そのままおおねずみを真っ二つにした。

くだものナイフを残し、おおねずみは消滅した。

「はあ…はあ…」

上手くいって良かった…。それより、2人は――。

「よっー！」

「こんなもんね」

既に戦闘は終わっていた。

どうやらアベルはひのきのぼうで敵をいなし、ピアンカはくだものナイフで数回斬りつけた後メラで倒したようだ。



ハ、ハハハ……。2人とも、流石というか何というか……。

「俺いらなくね？」

うん。知ってた。

## 第10話 潜入

「いっててて…」

「大丈夫？」

怪我をした俺にアベルが心配そうに寄り添ってくる。

「ホントに大丈夫？結構ボロボロよ。…てかアンタ意外と弱いよね」

落胆した表情でビアンカが言う。

「べ、別にこんなものどうって事ないし！ちよつと油断してただけだし！暗かったから剣が空振ってただけだし!!」

何となくわかってたけどやっぱコイツ等強いわ。流石ゲームの主人公&ヒロインだけはある。でもこんな小さい子どもにはつきり「弱い」と言われるのは正直恥ずかしい。やめろよ、俺の繊細な心が傷ついちゃうだろ。

「ごめんて、ムキにならないでよ。まあこのお姉さんがアベルとレオンを守ってあげるわよ！」

エッヘンと胸を張るビアンカ。

ワー、タノモシイナー。

胸はまだまだ頼もしくないけど。

「何よその目」

「イエ、ナニモ」

その後も何度か戦闘があつたが最初のような深手を負うことはなく、かすり傷程度で済ませられた。

ちなみに怪我はアベルがホイミをかけてくれたので大丈夫だ。いいな回復呪文。一家に一台アベルを置きたい。

しばらく歩くと森から抜け出し開けた場所へと出てきた。

そして月夜に照らされ一層と不気味さを醸し出す大きな建物が見えてきた。

「わー！おつきー！」

「ここが噂の……」

レヌール城へ辿り着いた。

「実物はかなり不気味だな」

「そうね……あれ？」

ピアンカは何かに気が付いた。

視線の先には大きな池があつたのだが、近くに焚き木が組まれておりゆらゆらと炎が灯っている。

「あれー？なんで火がついてるの？」

アベルが不思議そうに首をかしげている。

あー、あそこつて確か爺さんがいるんだっけ。

チラツとビアンカの方に目をやると青ざめた様子で焚き木を眺めていた。しようがない、少しだけからかつてやるか。

「ビアンカさんや、あれはもしや幽れ…」

「ひゃッ!!」

ビアンカは涙目で肩を震わせている。

「へ、へえ〜。ユーレイも寒くて焚き火でもするのかしらね。それか誰かが焚き火をしていったのね！」

「実はここには子どもを食べる悪霊が住んでおり、俺たちを丸焼きにするため準備を…」

「そ、そそ、そんなわけないでしょ！ほら、2人とも早くい、行くわよ！」

ビアンカさんや、動揺しすぎて手と足が同時に出てるぞ。

「アハハ！ビアンカおもしろーい！」

\*\*\*\*\*

「レオン兄ちゃん、全然開かないよ」

「うーん、困ったわね。どこか他のところから中に入れないかしら……」

俺たちは正面玄関から城内へ入ろうとしている。しかし扉が錆びているせいかビクともしない。城の裏にある階段から上がれる事は知っているが最初から向かうような野暮はしない。2人になぜ知っているのかと問い詰められるの面倒だし。

「裏口とかあるんじゃない？」

「それもそうね。確認しに行きましょう」

城の裏へと進んでいく。

そこには城壁が崩れむき出しになった螺旋階段が上へ上へと続いていた。

「ここから登れそうだな」

「じゃあ行きましょう」

ひたすら階段を上り続けると城内へと通じる入口がそこにはあった。

「扉がないだなんて不自然ね……」

「もしかして俺たちこの城の幽霊に歓迎されてたりして——」

ゴスツ!

ビアンカの拳が俺の脇腹へと突き刺さる。

「いてっ!冗談だって」

「冗談にしてもアンタのにやけ面にムカついた」

え、酷くない?

「2人とも早く行こうよー」

アベルが俺たちを急かす……て、お前もう入口通過して中に入ってんじやん!!

「ほら、行くわよ」

ビアンカに続き俺も入口をくぐる。

そして3人の体が完全に城内に入った瞬間——。

ガラガラガラガラ……ドンツ!!!

「!!?」

「うおっ、閉まった」

突然鉄格子の門が降りてき、入口を完全に塞いだ。

事前知っている俺は門の降りる音にびっくりしたただけだが、2人はかなり驚いている様子だ。

「ちよつと何よこれ!?わたしたち閉じ込められたの?」

「レオン兄ちゃん、どうしよう!」

「でもこれ開きそうにないしなあ。とりあえず進んでみるしかないんじゃないか?」

「…それもそうね。とにかく、進んでみましょう」

初めは取り乱していた2人だったが俺が落ち着いた様子で状況を説明しているうちに落ち着きを取り戻したようだ。

薄暗い部屋の中に3人の足音が響き渡る。

よく見ると通路の左右には棺桶が並んでいるのがわかる。

「なんか嫌な感じね」

ビアンカがぼそつと呟く。

通路の奥に階段が見えてきた。

階段を降りようとすると棺桶からガイコツの幽霊が出てくることを知っているの  
「2人とも気をつけろよ」とだけ忠告しておく。

といつてもこれはアベルに向けての言葉だ。

ガイコツはビアンカを連れていくと知っているのでコイツを守ってやれば済むこと  
だ。

なのでビアンカの側へと近寄る。

「…何よレオン。もしかして怖いのか？」

「ああ、怖え怖え超コエー」

「クスツ、何よそれ。こんな時でもふざけちゃって。いいわ、お姉さんが守ってあげる」  
何だかんだ姉御肌見せてくれるとこ、嫌いじゃないぜ。

そして階段を降りようとしたその時――。

ガタガタガタ!!!

「!!」

複数ある棺桶が一齐に開き、中からガイコツが出てくる。

そしてこちらへと素早いスピードで近寄ってくると同時に突風が押し寄せる。

俺はビアンカの腕を引っ張りそのまま胸に抱き寄せガイコツに背を向ける。

しばらくすると風は収まり辺りを見渡すと既にガイコツは消えていた。

「ビアンカ！大丈夫か？」

「え……ええ。大丈夫よ」

良かったら！やっぱイベント回避って出来るもんなんだな！

生死が問われるイベントでは無いにしろ、こうして回避できるという事実確認が出来

た事は大きい。



「よし、なら行くか」

「そうね……て、ちよつと待って！」

ビアンカが声を荒げる。

「アベルはどこに行ったの？」

……あれ？

## 第11話 ピンチ

「ねえ！アベルはどこに行ったの？」

「…恐らくさっきのガイコツに連れていかれた」

予想外の展開だ。ゲームの時は主人公が連れていかれなかったことなんて気にも留めていなかった。自分の中でアベルには何かしらの抵抗やご都合主義があると安易に考えていた。だが現にアベルはここにいない。ビアンカを守ればイベント自体を回避できるという先入観に囚われ過ぎていた。

「急ごう、アベルはまだそう遠くには連れていかれてないだろう」

「わかったわ」

階段を降り、左右に鎧が飾られている通路を歩く。

この時俺は最悪のケースを考えていた。

本来ゲームで存在していたイベントを先ほどのように回避したとする。

そう、回避は出来るのだ。だが問題はそこではない。

今回ビアンカではなくアベルがイベントの被害に合っている。

これは、つまり――。

(何かしらの形でイベントは確実に発生するということを暗に示している…!?)

…最悪だ。この仮説が正しければ仮に古代の遺跡でパパスが助かったとしても代わりに誰かが死ぬ、ということになる。

いや、まだそうと決まったわけではない。

もしもガイコツイイベントの時ビアンカとアベル2人を抱き寄せていたらどうなった?  
?

3人まとめて連れていかれる?それとも俺だけ?

そもそも対象がビアンカからアベルに変わった今、きちんとゲーム通りにシナリオは進むのか?

クソツ、どうする……今後起こり得るだろうイベントはどうすれば――。

「ねえ、ちよつとー聞いてるの?」

気づけばビアンカが大きな声を上げていた。

てか、さつきから呼ばれていたようだ。全然気づかなかった。

「えつと…何?」

「だーかーらー!さつきこの鎧動かなかったかって言ったのよ」

ビアンカは1体の鎧を指差しこちらを見ている。

はあ…鎧?え、これ動くの?

……て、考えるだけアホらし。

そんなの動く訳……………あれ？

いや！動く！確かこの鎧は——。

「……………見たくな〜ッ!!」

突如、鎧は崩れ落ち中から本体が出てきた。

そうだ、こいつは——。

「うぐくせきぞうだ!」

ビアンカは突然のことで理解が追い付いていないのか。

俺はビアンカの方へ走り出し、そのまま突き飛ばす。

「キャッ!!」

床に倒れ込むビアンカ、だが——。

「うぐッ!」

俺の脇腹に激痛が襲い掛かる。

先程うぐくせきぞうがビアンカに攻撃しようとするのが見えた。なんとかビアンカを守れたが代わりに俺が攻撃をくらってしまった。

そのまま通路の向かいにある石像まで飛ばされる。

「レオン!!」

「俺に構うな！攻撃しろ！」

ビアンカは戦闘態勢に入る。

「これでもくらえッ！」

ビアンカはメラを唱えた。飛んでいった火球は石像の胸元に着弾する。

——が、少し表面がかけただけで大したダメージは入っていないようだ。

「そんな……！」

うごくせきぞうはビアンカに向かって突進する。

「うッ!!」

うごくせきぞうの攻撃は命中しビアンカは階段付近まで吹っ飛ばされてしまった。

コイツ…結構硬くてダメージも意外とデカイんだよなあ。

ビアンカはかろうじて立ち上がってるけど、あの様子じゃ次まともにくらえば相当危ないぞ…。

うごくせきぞうがビアンカに近づいていく。

俺は剣を抜き、振りかぶりながら叫ぶ。

「ビアンカ！頭を伏せろッ！」

ビアンカはとっさにしやがみ込む。

俺は腕を力いっぱい振り下ろし、持っていた剣をうごくせきぞう目掛けて投げつけ

る。

こちらの叫び声に気づいたうごくせきぞうは振り返る。

と、同時に投げた剣がうごくせきぞうの顔面に直撃した。

「ギ、グギッ……」

直撃した剣はそのまま階段付近にある窓ガラスをぶち破り、外へと落ちていった。

後で回収しないとな……それより——。

(き、効いてる?)

よく見ると敵の右目が欠損している。

そのせいか腕を振り回しピアノカに攻撃を仕掛けているものの、一向に当たる気配がない。

好機と思った俺は腰にぶら下がったナイフを右手に取り、うごくせきぞうへと接近する。

強く握りしめたナイフを敵の頭部へと突き刺す。

ズガンッ、とかなり手ごたえのある攻撃が敵を貫く。

(この感覚……もしかして『会心の一撃』か?……この手応え!)

倒した! そう、確信してしまった——。

ベキツ!!!

(……………え?)

倒したと思った。

故に慢心してしまった。

今までの傾向から大丈夫だと判断してしまった。

では何故、俺は壁に吹き飛ばされているのだろう。

では何故、ビアンカが心配そうに駆け寄ったがすぐにその表情は恐怖の色に染まったのだろう。

では何故、俺の体は痛みなど感じていないのにピクリとも動かないのだろう。

あれ?俺どうなってんだ?

敵の攻撃をくらった左腕を見してみる。

…なんだ、これ?

そこには原形を留めてはいるものの、赤黒く腫れ上がりバキバキに砕かれた上腕が

あつた。

(あれ……なんかヤバくね?)



## 第12話 反省

「レオン、しっかりして！レオンッ!!」

ビアンカは今にも溢れ出しそうな涙を目にいっぱい溜めながら俺の名前を呼んでいる。

ごめんビアンカ、今頭がボーっとして何も考えらんないや。

飛ばされた勢いで頭も打つてたみたいだ。いつてえ…。

懸命に俺を呼びかけるビアンカの後ろに影が見えた。

「ッ!!……ビアンカ、後ろッ!」

ハッと敵の気配に気づいたビアンカは自身のくだものナイフをうごくせきぞうの腹部に突き刺す。

しかし相手の力が強く壁に押しやられているようだ。

ビアンカは必死に持ち堪えているが、それも時間の問題だろう。

「バカか……逃げろ!」

「うる……さい!」

「俺に構うな!……行け!」

「うるさいって言うてんのよー」

ビアンカは苦しい表情を浮かべ俺に反論する。

やめてくれ。今お前がピンチなのはこういう状況を作り出した俺のせいだ。

もしもここにいるのがアベルだったならもつと状況はマシだったのだろうか。

そうであれば俺は、アベルたちにとつて最善のルートへ導いてやるという自身の勝手

なエゴのせいで、今ビアンカを危険な目に合わせているのではないだろうか。

(それじゃ、意味ねーだろうがッ)

「お前が…もしここで大怪我したらどうするんだ！下手すりや死ぬぞー」

「……んてよ」

え、なんて？

「なんでよー！なんでアンタはアンタの心配をしないのよ！」

ビアンカの叫び声が通路の奥まで響き渡る。

「アンタがやられそうってのにわたしだけが逃げてなんていられないでしょ！ 何よ！

ここに来るまであんなにおちやらけて元氣だったじゃない！なのにそんな…ボロボロ

になってまでカッコつけてんじやないわよ」

ビアンカの鋭い眼差しが俺の目に向けられる。

「…アンタは、私が守る」

その時、うごくせきぞうの腕がビアンカに振りかかるのが見えた。

(危ないッ！)

頼む…俺の体動いてくれ。

こんな序盤でゲームオーバーなんてごめんだ。

せめてビアンカだけでも…。

「クッソオオオオ!!!」

どこから力が湧き上がったのかと言われると正直良くわからない。

無我夢中で起き上がった俺は振りかかる攻撃に対し、右手に握りしめたナイフがぶつかる直前に叫んだ。

「カウンターーッ!!!」

俺のスキルと敵の攻撃が衝突する。

その衝撃で敵はノックバックスし体勢を崩しかけている。

もう無理だ。体がいう事をきかない。

だから――。

「今だ…ビアンカ!」

ビアンカにとどめを任す。

俺のスキル『カウンター』では敵を倒せない。

パパスとの稽古やモンスターとの戦いの中で気づいたのだが、どうやらこのスキルは「他者からの物理攻撃を同等の力で跳ね返す」ことしか出来ないようだ。故に倒すまでにはいけない。精々ノックバックや武器をはじく程度だ。

後は頼んだ——ビアンカ。

「ぶちかませー！」

「メラッ!!」

ビアンカから放たれた火球はうごくせきぞうの顔面に直撃し、そのまま相手の頭部が爆散した。

恐らく俺が貫通した穴の中に着弾し内部から爆発したためなのだろう。うごくせきぞうの体がガラガラと音を立てながら崩れ落ち、そのまま消滅した。

「はあ…はあ…」

何とか乗り切った…。

体の損傷に加え極限の緊張状態から解放された俺は膝から崩れ落ちた。

あー無理。もう動けない。

体は急にずつしりと重くなるし、なんか段々腕が痛んで——。

(ツツツ!!?)

「あ、あ、あああああああああああ!!!」

痛い。痛い。痛い。痛い。痛い。

痛い。痛い。痛い。痛い。痛い。

緊張の糸が切れたせい、今になって砕けた腕が痛み出した。

こんな状態だ。痛いに決まっている。どうして痛まなかったのかが不思議なくらいの激痛が俺を襲う。

「レオン！大丈夫!?!」

ビアンカが慌てた様子で俺の側に駆け寄る。

だが俺は痛みのがあまりうずくまることしか出来ない。

「酷い状態……どうすれば……」

状態の深刻さに。パニックを起こしているのだろうか。

慌てふためく様子のビアンカ。

「カバンの……中……」

「え!?何、レオン?」

「カバンの中……やくそうが……。あと……ナイフと……布を……」

「そっか!」と俺の言いたいことを察したビアンカはすぐに対処を始めた。

\*\*\*\*\*

「じゅっ。」

「ああ、少し…楽になった……」

俺のカバンの中にあるものでビアンカが処置を行った。

レヌール城へ来る前にすり潰しておいた薬草を怪我の箇所へ塗り、鞆に納めたナイフを添え木代わりにヘアバンドで上腕を固めた。

だがこのままでは左腕自体が揺れ動いてしまうので、ビアンカの羽織っていた布を輪つか状にし首から吊り下げ、肘を曲げた状態で前腕を通し固定した。

このおかげで多少痛みは引いたものの激痛には変わらない。

「よく対処の仕方良かったな」

「前にお父さんが階段から落ちて腕の骨を折ったことがあってね。その時ママがお父さんにこうやってるのを見てたの」

お前の父ちゃん重度の風邪に加え過去に大怪我もしてたのか、…なんて不運な人。

それよりもアベルのやつが心配だ。

まだ痛みは一向に引かないが、いつまでもここに留まる訳にはいかない。

「いてて…アベルを探しに行こう」

「ちよつと、無茶はダメよ」

「ビアンカのおかげで歩けないことはない。肩貸してくれば助かるんだが」

「当たり前でしょ…ほら、大丈夫？」

痛みのせいで思いのほか早く歩けない。

ビアンカは俺の歩幅に合わせながらゆっくり歩いてくれる。

少し歩いたところでビアンカが口を開く。

「…ごめんね」

「何が？」

ビアンカの表情が暗くなる。

「わたし、アベルとレオンを守れなかった。アベルはどこ行ったかわかんないし、レオンはこんなにポロポロになって…。わたしがしっかりしないと…、わたしがお姉さんだから2人を守らないと…て、そう思ってたのに。結局さつきもレオンに助けられちゃった

しね」

ビアンカの声が徐々に小さくなり、悲痛な表情を浮かべている。

「別に気にすんなよ。…てか、俺もごめん」

「…何でアンタが謝るのよ」

違うんだビアンカ。本当はお前がそんなこと思う必要なんてないんだ。

これは俺の勝手な行動が招いた結果なんだよ。

そして俺はこの結果を反省しないといけない。

ゲームの流れに逆らう限り、ありとあらゆるリスクを想定するべきだった。

もし俺の軽率な行動のせいで生きるはずだったものを死なせてしまうようなことになつたら——なんて考えたくもない。

だから本当に謝るべきなのは俺なんだ。

俺たちの間に沈黙が訪れる。

(…なんか、元気ねーな)

ビアンカは気負い過ぎなんだよ。

何か別の話題でも……。

「…あ、あー、でもあれだな。もっと早く渡しとけば良かったな」



「なんのこと?」

「ヘアバンド」

俺は自身の上腕を固めているヘアバンドを見ながら言った。

ビアンカに目を向けると何の話?と言わんばかりの表情だ。

「ビアンカって頭なんにも装備してないだろ?だからこれお前の装備品として買ってただけど、渡すのすっかり忘れててさ。これをつけてれば多少なりとも守備力は上がるだろ?」

ビアンカはぱちくりと目を丸くしてこちらを見ている。

だがそれも束の間、今度はクスクスと笑い始めた。

「アハハ、何それ!ヘアバンドつけて守備力が上がるってどういうことよ」

あれ?上がんないの?

もしかして俺の守備力に関する認識って間違ってる?

「…でも、ありがと」

あれー?と考え込む俺にビアンカが微笑みながらお礼を言った。

その笑みがあまりにも綺麗で優しかったもので少しドキツとした。

「お、おう」

…なんかちよつぴり恥ずかしい。

「じゃあ町に戻ってレオンの腕が治ったらそれ頂戴！」

調子に戻ってきたのか、ビアンカが弾んだ声で俺に言う。

「え!?これ、俺の血や砂埃で汚いぞ。新しいの買うよ」

「別にいいじゃない。レオンが渡したかったのはそこにあるヘアバンドなんでしょ? 洗

えば済むわよ」

んなアホな。

予想外の返答により思わずしかめっ面になる。

まあどうせ汚さのあまり買い替えるのが落ちだろ。

「へーへー、了解です」

そういうとビアンカは満足気な表情でニッコリと笑顔を見せた。



「あ、ちなみに俺ビアンカより1歳年上だから」  
「え、嘘!？」

## 第13話 城の主

ビアンカと通路の奥へと進んでいくと両開きの扉がそこにはあった。

取っ手を掴みガチャリと扉を開けると、そこは屋上だった。

屋上の中央には墓石が2つ並んであり、それを挟むような形でブロック石で造られた大きな長方形の溜池が2つ存在していた。

「わ！おつきなお墓ね、…て何か書いてある」

「どれどれ：ハハ、これ『ビアンカの墓』って書いてるぞ」

「何ですって!?!誰がこんなものを」

キーツ！とビアンカは地団駄を踏み激怒している。

まあ気分の良いもんじゃないよな。

すると突然、その隣の墓石からかすかではあるが何か物音が聞こえた。

「な、なに!?!」

「やっぱりここか。ビアンカ、手伝ってくれ」

俺は「アベルがいるかも」という旨を伝え、ビアンカと一緒に『アベルの墓』と刻まれた墓石を力いっぱい押しした。

「フンッ！………重！」

「こん………のッ!!」

ズズズとゆっくり墓石が動く。

墓石の下には空間があるようで覗いてみると――。

「アベル！」

仰向けに寝ているのだろう。アベルの足が見えた。

「ッ！レオン兄ちゃん!!」

「今出してやるからな！もう少し我慢してくれ！」

再度墓石を押し、何とかかすことに成功した。

いや、これゲームだったらアベル1人で墓石からビアンカ救い出してたけど実際重すぎ！絶対無理だろ！

「レオン兄ちゃん！怖かったよ〜！」

アベルは半べそをかきながら俺に抱き着いてきた。

うん。人が1人入れるスペースとはいえこんな光も差さない閉所に閉じ込められるのは俺でも怖い。

「よく頑張ったな。………いってて」

「あれ!?!怪我したの?」

「ちよつとドジ踏んでな」

「はあ…そんなんじゃないでしょ。…あ、そうよ！」

ビアンカが何かを思い出した様子。

「ねえアベル。あなたまだホイミ使える？」

「使えるけど？」

「レオンが怪我したところに使つて欲しいんだけど」

すぐさまアベルは俺の脇腹、それに続き左上腕へとホイミを唱える。

ビアンカいわく、回復呪文には表面の傷だけでなく骨や筋繊維など内部をも修復する

ことが出来るそうだ。加えて疲労回復といった副産物もある。

ただし、それを実現するにはホイミ程度では無理とのこと。

ホイミのような初級呪文では精々表面の傷を治す程度だそうだ。

それでも薬草を使うよりかは呪文をかけるほうが断然治りが早い、というのがこの世界の認識らしい。

「どっつー」

「うん、さつきよか全然楽だ。サンキユな、アベル」

ステータスを確認する。

名前：レオン 性別：男 レベル：13

職業：村人

HP：50／50

MP：80／118

攻撃力：33

守備力：21

呪文：なし

スキル：カウンター

（あ、レベル上がってる。うごくせきぞうとの戦闘で上がったのか）

薬草を使用していたことから1回のホイミでHPが最大まで戻った。効果自体もゲームの時と相応のようだ。

それでも数値上では全回復しているのに、実際は骨折しているというのが不思議である。

もしかしたらこの世界でいうHPも認識のズレがあるのかもしれない。

「よし、じゃあ先に進むか」

俺たちは墓を横切り、もう一つの屋内へと通じる扉へと向かった。

\*\*\*\*\*

扉を抜けると通路のようなどころに出た。

そこにはテーブルや椅子、本棚などがあるのだが少し乱雑に散らかっている。もう少し奥の方を見ると薄っすらと明るく開けた場所があつた。

どうやら窓があり、そこから差し込む月明かりが部屋を照らしているようだ。

「……あれ？」

アベルが俺の裾を引っ張る。

「どうした？」

「誰か居るよ」

アベルが窓の方を指差す。よく見ると人影のようなものが見える。

ああ、王妃様か。

「……もしかして、幽霊とか？」

ピアンカも気づいたようだ。



部屋はいくつか本棚があるのだが、その中央には二つの本棚が隙間もなく並べられていた。俺たち三人はその本棚の陰から王妃様の様子を伺っていたが、少しするとアベルがトテトテと王妃様の方へと歩いて行った。

そのアベルの行動にビアンカは「ちよつと！」と焦っている。

「何してるの？」

アベルが王妃様に問いかける。

すると王妃様はアベルを優しく見つめ、その優しい目を俺とビアンカにも向けた。そしてこちらを見ながら手招きを始めた。

あれ……こんなシーンあつたっけ？

何となく俺とビアンカは王妃様の方へと向かった。

が、王妃様の元にたどり着く前に、王妃様はそつと目を閉じ姿を消した。

その瞬間、先ほどまで俺とビアンカの居た本棚がズズズと音を立て移動し、本棚で隠れていた階段が姿を現した。

もしかして、俺たちが居たから危なくないように誘導してくれたの？

王妃様の優しさパネエ。マジ女神。

「ビックリした〜。もしかして、ついて来てって事かしら？」

「きつとそうだよー！行こっ」

アベルが颯爽と駆けだし階段を降りていく。

「ちよつと、アベル！」

ビアンカがアベルの後を追う。

やれやれ、わんぱくなお子様なこつた。

もう少し怪我人を労った行動をして欲しいもんだと心の中で呟きながら、俺は歩いて二人の後を追った。

階段を降り通路へ抜けると、左手に大きな扉が見えた。

片方の扉が開きつばなしな事からアベル達はこの中、つまり王妃様の所へと無事たどり着いたことがわかった。

開いている扉から中を覗くと、丁度目の前にアベルとビアンカがいた。

どうやら部屋を出るところだったらしい。

「ヤっつきの幽霊はっ！」

「いたよ！でね、お話を聞いてきた。なんかね、魔物がここに来てジャアク？な手の者がハライセで……」

「あーいいいわよアベル。ソフィア王妃からお願いされたのよ。この城に住み着いている

魔物を追い出してほしいってね」

たどたどしいアベルの説明をビアンカが要約してくれた。

そういえば王妃様の名前ってソフィアだったな。

「あーね、了解。 んじゃ、いっちょ館内全モンスターの殲滅行つたりしますか〜」

「何物騒なこと言ってるのよ。 多分、親玉みたいなのがいるんじゃない?」

俺の発言に対してビアンカはジト目で的確な反論をする。 ありがとうございます。

まあ親分ゴーストがいることは当然のごとく承知している。

「早くやつつけないとね!」

アベルが意気揚々と言う。

「じゃあ行きましょ」

俺たちは王妃様の居る部屋を後にした。

城の中を進む道中、幾度かモンスターの群れに遭遇した。

だがパーティメンバーが3人というのは心強く、難なく倒すことが出来ている。

「ん?」

進行方向の先に扉があるのだが、誰かが居たような気がした。

「ねえ、今の」

「誰かいたね」

二人も気づいたようだ。

少し駆け足で気配のある方へと向かう。

暫く進んでいると城外へと出た。

最初に通った螺旋階段へと繋がる通路が通っており、その通路を見ると――

「おお！私の元までたどり着いた勇氣ある者はそなた達が初めてじゃ」

王様のご登場である。

## 第14話 お化け退治

「どうかお願いじゃ！この城に住み着くゴースト達のボスを追い出してくれぬか？」

「いいえ」

そう言った瞬間、空から雷が……落ちずに俺の脇腹にビアンカの拳が刺さった。  
「何のために私達はここに来たのよ、バカ」

イテテ。ちよつとしたドラクエジョークってやつさ。

会話無限ループというシユールな光景を一度はリアルで味わいたかったんだよ。  
てかマジで脇腹痛え。ビアンカのやつホント容赦ねーな。

「そ、そうか。……すまぬ、そなた達には少々荷が重かったようじゃな」

あれ。もう一度問いかけないの？選択肢出ないの？

「じよ、冗談です！やりませう！私達に任せてください」

ビアンカが大慌てで王様に訂正する。

「そうか、やってくれるか！ありがとう、そなた達は誠に勇気のある者達じゃ」  
俺の返答で暗い顔をしていた王様が、今では満面の笑みで語りかけてくる。

ドラクエの世界とは言え、やっぱりここは現実世界なんだなと改めて実感した。

ごめんなさい、反省してるんでピアンカさんはこつちを睨まないでください。王様からボスの居場所を教えてもらった。

ついでに、真つ暗な通路があつて進めないところがあるという旨を伝えると松明の場所も教えてくれた。

どうせ城内に戻つた途端説明を受けるんだから先手を打つて聞き出した。

アベルとピアンカはそんなところあつたつけ、と首を傾げていたが気にしない気にならない。

早速、松明を求めて地下へと向かった。

「わあ！おっきな料理」

地下に到着した。

部屋を覗くとそこには釜戸や食器、調理台や調味料などがあり正しく厨房だった。

そしてアベルが釘付けになっているところに目を向けると、かなり大きなプレートに沢山の肉や野菜が盛り付けられていた。

その側には魔物2体と城のシェフらしき幽霊が1人いる。

一見華やかな料理に見えるが、その風貌に似つかない程の悪臭が漂っており鼻がおか

しくなりそうだ。

「何この臭い」

しかめっ面でビアンカが言う。

恐らく、あの料理に使われている肉が原因だろう。

(何の肉だ?)

……料理が気になるところだが、さっさと松明を回収して引き上げよう。

「俺が取ってくる。お前らはここで待ってる」

「場所はわかるの?」

「まあ、何となくな」

確か一番奥の壺だよな。

俺はコツソリと厨房へと入り、奥の壺を指す。

「うっぷ……こんな味付け、私だったら吐きそうだ……」

シェフの幽霊が呟く言葉が耳に入った。

……やはり一般的な食用肉を用いている訳じゃないのか。考えるだけでも身震いする。

奥の調味料棚までやってくると、その横に壺が二つあった。

奥側の壺の中を覗くとビンゴ、王様の言っていた松明が入っていたので回収。

無事アベル達の元へ帰り、そのまま一階へと戻る。

んじや親分ゴーストのどこ目指しますか……と、そうだ。

「悪い、ちよつと武器拾ってくるわ」

「そう言えばそうだったわね」

「二人はここで待っていてくれ」

うごくせきぞう戦で投げ飛ばした銅の剣を求め、俺は正面玄関を抜ける。

少し辺りを見渡すと地面に突き刺さった剣を発見した。

少し力を入れて剣を引っこ抜く。

あちやー。結構荒い使い方したから所々刃こぼれが凄いな。

精々親分ゴースト戦までが限界だろうな。

村に戻ったら親父に手入れ頼むか。

俺は背中に引っつけてある鞆に剣を収め、城の中へと戻った。

「どごう? 使えそう?」



「んー。ちよつと刃こぼれしてるけど大丈夫だろう」

「そう。じゃあ行きま……あら？」

そろそろ移動しようとした矢先にアベルの姿が見当たらない。

「まったく、アイツどこに――。」

城内を見渡すと1階の広間の方にアベルの姿があった。

アベルはポツンとただ佇んでいて、ボーッと何かを見ている様子だ。

「おーい、何してんだ。早くいくぞ」

「あ、うん！」

俺が声をかけるとアベルはハツとした表情になりこちらに顔を向け返事をした。

「何か気になるのか？」

「……ここで踊ってる人達を見ていただけ。何か、皆ちよつと辛そうだったから」

アベルの言葉を聞き、周囲に目を向ける。

さつきまで気にもしていなかったが、よくよく考えてみれば半透明の幽霊たちがうよ

うよと漂っている様は何とも非現実的な光景だ。

そしてこの人達は死んでもなお、望みもしない死者の舞踏会へと縛り付けられ、永遠

と踊らされ続けているのだ。

苦しみ、悲しみ、侘しきを感じながら――。

目先の光景だからこそ余計にこの人達の気持ち伝わってくる。

そんなことを考えると、急に胸がざわつき始め変な不気味さが俺を襲った。

(……ッ。気分がいいもんじゃねーよな)

どうしてか憤りを感じた。

「行くぞアベル」

アベルを連れ、ビアンカの元へと合流する。

「準備はいい?」

「うん!」

「OK OK、バッチリよ。でもその前に、俺いい作戦思いついちゃったんだよねー」

俺がニヤリと不敵な笑みを浮かべるとビアンカの顔が引きつった。

「アンタがそういう顔する時は大抵ろくでもない事ね」

俺は二人に作戦を伝えた。

さーて、我が物顔で鎮座する親玉さんにお灸をすえに行きますか。

\*\*\*\*\*

——王座の間。

「あれが王様たちの言つてた奴？」

「一人しか居ない辺り、それっぽいな」

俺たちは王座の間へと到着し、柱から顔を覗かせ敵の様子見をしていた。

「んじゃ、打ち合わせ通りよろしく」

「わかった！」

「本当に大丈夫なのかしら」

俺とビアンカは王座の間へと入ると、親分ゴーストは俺たちの存在に気づいたようだ。

「ほほう……。まさかここまで来るとはな。大したガキ共だ」

「おい見ろよビアンカ！レヌール城のオバケってやつは本当に化物見たいな顔してるのなー（棒）」

「まー！何て恐ろしいのかしらー。まるで馬にでも蹴られたような醜い顔だわー（棒）」  
 「なっ!？」

俺たちの言葉を聞いた親分ゴーストは少し頬を引きつらせた。

だがすぐに作り笑顔をし、俺たちに語りかける。

「ま、まあ……折角ここまで来たんだ。褒美に美味しい料理を作つてやろうじゃないか」

「えー！化物が作る料理だつてよー。絶対不味いに決まつてるよなー（棒）」

「きつとそうよー。あの顔面から漂うトイレのような臭い料理に決まつてるわー（棒）」

あらー、親分ゴーストさん大分眉がピクついてますわー。

もう今にも怒りで爆発しそうな勢いだな。

「き、貴様ら……ツゴホン！お、美味しいから、ほらーさあ、こつちに来なさい」

「でもでも。これ以上近づいたらマジで鼻がもげそうだし。お前マジ臭いし」

（棒）」

「さつさと馬小屋に帰つて水浴びでもしてくれないかしら。まあその体臭だと例え聖水を浴びたとしても臭い落ちなさそうだけど」（棒）」

散々な罵倒を浴びせ続けると、親分ゴーストはわなわなと震えだした。

「ガキ共！いいからこつちへ来い！」

そして遂に相手は怒りの頂点へと達したようで、親分ゴーストは王座から立ち上がり

怒気を荒げる。

ありがとう、それを待っていた。

「んじゃ二人ともよろしく」

「メラー！」

俺の合図でビアンカはメラを発動。

親分ゴーストに命中——せずに相手の足元へと着弾した。

ドカンッ!!!

「な！なにを!?!」

突然の出来事に相手は驚いているようだ。

だが、すまない。アンタの悲劇はこれからだ。

「グハッ!!」

親分ゴーストは悲鳴を上げながらグラッとバランスを崩す。

そのまま前のめりに倒れ込み、顔から地面へとぶつかる……ことはなかった。

何故かって？それはビアンカのメラにより地面に穴が空いたからだ。

本来ならばゲームのシナリオをなぞると俺たちはトラップに引つ掛かり地下へと転

落コースだ。

だがそのトラップを逆手に取った。

実は1階に居た時、広間から王座の間へと繋がる天井をよく観察していた。すると明らかにトラップの幅分、天井にかなり深い窪みが出来ていた。

そもそも城を建築する際にトラップなんて作るはずがないから、親分ゴーストが人間を落とすためだけに簡易的に作ったのだろう。

だから俺はこう思った。

実はあの床は意外と薄いんじゃないのか、と。

後は簡単、空いた穴に親分ゴーストを落としてしまえばいい。

しかし力づくで落とすには少々リスクがある。何せこっちは複数人とはいえまだ子どもだ。万が一、力で負けてしまえば元も子もない。

そこでアベルだ。

初めに俺とビアンカで親分ゴーストの目の前に出る。

相手が俺たちに気を取られている合間に、アベルがこっそり王座の後ろへと移動する。

俺とビアンカで相手を煽り、王座から引き剥がすよう誘導する。

相手が立った瞬間、ビアンカの呪文で床を破壊すると同時にアベルが親分ゴーストの後頭部に全力の攻撃をお見舞いする、という算段だ。

そして見事、計画通りに事が運んだという訳である。

親分ゴーストはそのまま穴の中へと入り込み、地下へと落下していった。

「やった！やってやったぞ！」

「うまくいったね！」

「まさか本当に成功するとはね」

ビアンカがやれやれと疲れた表情だ。

いやーホントに成功するとはね。俺も正直ビックリ。

穴から下を覗くと打ち所が悪かったのだろうか、親分ゴーストは料理プレートの上でのびきっているようだった。

「最初に作戦を聞いたときは半信半疑だったわ。……まあ、結果的に上手く行ったから別にいいけどね。にしてもアンタ、演技下手すぎるわよ」

「そういうお前こそ下手クソ過ぎんだろ。でもその割には相手をイラつかせるボキヤブラリーは豊富なのな」

「何？ケンカ売ってんの？」

「イーツ！と俺とビアンカがいがみ合う。」

その様子をアベルはケラケラと楽しんでいる。

何だこれ。

「まあ、とりあえず」

「お化け退治」

「「大成功〜!!!」」

3人でハイタッチを交わす。

こうして俺たちはレヌール城お化け退治を成し遂げたのであった。



## 第15話 夜明け

勝利の喜びに満ち溢れる中、バルコニーの方から優しい光が玉座へと差し込む。バルコニーに向かうと王様と王妃様がいた。

すると急に体がふわふわと宙に浮き、屋上の墓石前までと連れていかれた。

おっふ。浮遊したせいでお股がヒョンヒョンする。

「おお、良くぞやってくれた！心から礼を言うぞ」

「本当にありがとう。あなたたちのおかげで、これからはゆっくり眠れそうです」

こう正面からまじまじとお礼を言われるのは何だか小恥ずかしい。

でも、こういうのも悪くないな。

アベルとビアンカの顔を見ると二人とも満足気だ。

「では行くとしよう」

「はい、あなた……」

王妃様が目の前にしゃがみ込み俺たち人の顔をじっくりと見つめる。

「さようなら。あなたたちのことは忘れません……」

王妃様はそう言って立ち上がると王様と手を繋ぎ、二人は墓石へと歩き出した。

そしてスツと二人の姿は消えていった。

「良かったわね。これからは二人でゆつくりと眠りにつけるはずよ」

「うん！王様たち喜んでたね」

「一仕事終わった、て感じだな」

俺はグーつと背伸びする。

「あれ？何かしら？」

ビアンカが王様たちの墓石の前でしゃがむ。

そして何かを拾い上げた。

おお、それが例のゴールドオーブってやつですか。

月夜に照らされるとまるで発光してるかのような神秘的な輝きを感じる。

「わー！！」

「綺麗な宝石ね。きつと王様たちのお礼よ。持って行きましよ！」

ビアンカはゴールドオーブをアベルに渡した。

「んじゃ帰るか」

俺たちはレヌール城を後にした。

\*\*\*\*\*

——次の日。

「さあ約束よ！その子猫、貰って行ってもいいわよね？」

「おい、どうする？」

「仕方ないか……」

俺たちはベビーパンサーを引取る件で男の子たちの元へとやってきた。

強気なビアンカの態度に対し、男の子たちはしぶしぶといった態度である。

はあ、動物いじめならぬ魔物いじめも大概にしとけよー。

今はまだ子猫に見えてもいずれ凶暴な魔物へと成長する。

そうなればお前らは真っ先にコイツの餌食になるだろう。

それを引取ろうて言ってるんだ。むしろ俺たちはお前らの命の恩人と言っても過言ではない。

ハハハ、感謝するんだな。

「アンタ、何気持ち悪い顔してんのよ」

勝手な脳内妄想に浸っているとビアンカから悪口とも取れる指摘が入る。

あれ、顔に出てた？俺そんなにキモかった？ちよつとシヨック。

てかいつもストレートに俺が傷付く言葉投げるのやめてもらえませんか？

「ま、約束だしな。お前らも頑張ったからこの猫はあげるよ」

そう男の子は言い、ベビーパンサーを引き渡した。

「エヘヘ！よろしくね」

「これでもういじめられないわね」

ベビーパンサーを助けたことにアベルもビアンカも嬉しそうだ。

「じゃあ行きましょう」

宿に戻りながら、3人でベビーパンサーの名前について話し合った。

「だーかーらー！ゲレゲレ一択に決まってるだろう！」

「チロルの方が可愛いわよ！アンタの壊滅的なネーミングセンスに比べたら断然こつち

だわ！」

「アハハ……」

絶賛白熱中。何で!?ゲレゲレってなんかこう惹かれない？ピンと来ない？

異質なものを見つけたら遂飛び込んだじゃう感じ分かんないかなー。

ビアンカも強情で一方に引かないし、アベルは俺たちの戦いを若干引き気味に傍観してるし。

「あーもういいわ、埒が明かない。アベル、あなたが決めなさい！」

「え、ボク!?!」

ビアンカは一向に進まない名付け討論に痺れを切らし、アベルに命名を任せた。

俺らで争うよりかはいいか。

アベルは「うーん」と何度も唸りながら悩んでいたが、絞り出すように名前を告げた。

「……ポロンゴ、ていうのはどう?」

「普通だな」

「普通ね」

案外無難なところをついてきたアベルに対し、俺とビアンカはつまらなさそうに口にした。

アベルは「えっ!?!ダメ!?!」とオロオロとしている。

まあ将来の魔物使いが命名したんだ。文句は言うまい。

ベビーパンサーことポロンゴがパーティーへと加わり、俺たちは宿へと戻った。

「それでは世話になった」

「いえいえ、こちらこそパパスさんに面倒をお掛けしました。またいつでもいらしてください」

パパスとダンカンが別れの挨拶を交わす。

そう言えばパパスは風邪を引かなかつたみたいだ。そもそもパパスの風邪なんて主人公が町の宿で夜を明かしたときの救済措置みたいなものだからな。

風邪をひく可能性もあったのかもしれないが、結果的に罹らなかつたのだから良かった。パパスが元気なおかげで腕を治してもらえたのだから。

やっぱりパパスのホイミはこの世界でもおかしい程の回復量を持っていた。

あれだ、主人公がダメージを受けるとホイミで完全回復させるやつ。

恐らくパパスのホイミはベホマ相当の効果を持っていると言える。

そのおかげで俺の折れた腕も骨からきっちり修復することが出来、今では腕を振つても全然痛みがない。

パパスがいなかったら骨折患者として暫く生活するところだった。

それだけはマジ勘弁。

「ではアベル、レオン。行くとしよう」

俺たちは町の入り口へと向かいます。

「アベル！レオン！」

後ろの方からビアンカの声が聞こえ、俺たちの元へと向かってきた。

「暫く会えないかも知れないから、これをあげる」

ビアンカはそう言うのと、アベルにリボンを差し出した。

「これ、貰っていいの？」

「ええ！……でも、男の子にリボンはちよつとおかしいか。そうだわ！」

ビアンカはポロンゴの元に行き、首元へとリボンを付けた。

「これで良し！……あ、それと」

俺の目の前にビアンカが来て手を差し出した。

「え、何？」

「ヘアバンド。忘れたとは言わせないわよ」

「げー、マジなの？新しいのにした方がいいんじゃない……」

「いいから、ホラー！」

俺はしぶしぶカバンの中から汚れたヘアバンドをビアンカに渡す。

受け取ったビアンカは満足気にニツコリと笑う。

そしてビアンカは一步後ろへと下がる。

「アベル！レオン！またいつか一緒に冒険しましょうね！」

「うん！絶対行こう！」

「おう！今度はボロンゴも加えて冒険しようぜ」

俺たち3人はお互いの顔を見合わせ、笑いながら約束した。

昨日は恐いことや、痛いこともあった。

でもワクワクしたり、お互い助け合ったり、人の為になることもした。

そんな楽しい冒険をしたんだ。

（だから、またいつか）

またいつか来るであろう、楽しい冒険を夢見て――。



## 幼少期・妖精の村編

### 第16話 違和感

サンタローズ村に戻ってきた次の日、俺はサンチヨの家へと来ていた。

「こんにちわー」

「おや、レオン君ではありませんか」

「レオン兄ちゃん！」

アベルが俺を見るや否やお腹へとダイブしてきた。

「うおっと！今日も元気だなアベル」

「レオン兄ちゃん遊ぼうー！今日お父さんずっと家にいるって言うからつまらないんだ」

「そっか。んじゃ遊ぶか……って言いたいんだけどサンチヨさんに用があつて来たんだ。

また後でな」

「えー！じゃあボロンゴと外で遊んでるから来てねー」

アベルはそう言うのとボロンゴと一緒に外へと駆け出して行った。

いやはや、相変わらず元気だな。

「レオン君、私に用ですか？」

「うん、ちよつと色々聞きたくて」

そう言うのとサンチョは快く了承してくれた。

俺はいくつか疑問をサンチョに問いかけた。

内容はステータスや概念の認識についての話なのだが、主に3つ。

1つ目はHPについて。

俺はレヌール城で負傷した時の出来事を話した。

ホイミをかけたとき腕は折れているがHPが全快だった件だ。

「レオン君、そんな重傷を負っていたのですか!？」

サンチョは俺の身に起こったことに驚いていたが、質問については答えてくれた。

どうやらHPは「耐久値」に依存するらしい。

耐久値というのは見えないステータスだとサンチョは言っていた。

詳しく説明すると、モンスターから受けるダメージ量は耐久値の高い人間はダメージ量が少なく、耐久値の低い人間はダメージ量が多いらしい。

もちろんダメージ量は守備力も関係するので、さしずめ耐久値は第二の守備力といっ

たところだ。

そして耐久値というのは、その人の体の状態によって変動するらしい。

例えば、健康な肉体を持っている人の耐久値を100と仮定すると、病気やケガなど体の状態が悪い人だと耐久値が70や50と下がったりする。

仮にその人が重い病気を患っている場合だと耐久値はかなり低く、モンスターから攻撃を受ければかなりヤバイ。

最悪、ショック死のようなことが起こるらしいのだ。

つまり俺が負傷していた時の状態と言うのは、HPは最大だが耐久値が100から幾分下がっていたと考えてもらっていい。

冒険をするにあたって怪我は付き物だが、病気だけにはマジで気をつけようと思っ

た。

2つ目はこの世界に存在する呪文と特技について。

レヌール城にてビアンカの前でスキル「カウンター」を使用したのだが、そのことについて特にビアンカから疑問を投げかけられる事はなかった。

俺としては説明（と言つてもどう説明すべきか）する必要がなくて良かったのだが、逆にこの世界の人は呪文と特技の種類や認知はどれ程なのか気になった。

サンチヨいわく、『呪文や特技はたくさん種類がある事は知られているが、皆が皆全ての種類を把握している訳ではない』というのが世間一般の認識らしい。

呪文についての文献は存在はするらしいが、一般的には出回っていないようなので猶の事らしい。

だから、特技「気合いため」を見たことない人が初めてその特技を見たとしても「そんな特技もあるのか」程度の感覚だという。

元々俺はゲームを通じてこの世界にどんな魔法や特技があるのかを大方把握いたため、何となく「スキル」という本来無いはずの存在を周りに知られるのはリスクである」と先入観を持っていた。

だがサンチヨから話を聞く分に、案外俺のスキルは特技程度の存在なんだと思った。そう考えると少し肩の力が抜け安堵した。

3つ目はステータスについて。

俺はどうしてもステータス画面の存在に違和感を感じていた。

だってあまりにも非現実的だ。電子タブレットを用いている訳でもないのに文字盤が宙に表示されているのだから。

俺はステータスの位置付けについて単刀直入にサンチヨに聞いた。

「サンチョさん。何でステータスって表示されるの？何でHPやMP量がわかるの？」  
するとサンチョは少し難しい顔をして答えた。

「何で、と言われましても。そういうものかしら……」

……うーん。サンチョの返答からすると当然の常識としか言いようがないのか。  
存在して当たり前、か。

つまり『ステータスの表示』と言うのは、俺の居た世界で言うところの『患者の容態を診るための心電図モニター』と似たような位置付けなのかもしれない。

存在するから用いる。用いるから状態がわかる。ただそれだけの事なのだろう。

（あんまり深く考えるなっということか）

俺は椅子から降り、玄関へと向かった。

「色々教えてくれてありがと！俺、アベルのとこ行つてくるよ」

「いえ、またいつでも。あまり坊っちゃんと遠くに行かないように」

「わかった」

俺はサンチョ宅を後にした。

俺は外に出るとアベルの姿を探した。

ったく、ボロンゴが増えたからってどこまで遊びに行ってるのやら。少し駆け足で辺りを探すと――。

ドンツ！

「いつてー！」

俺は誰かとぶつかったようで、その場に転んでしまった。

「あ、ごめんね坊や。怪我はない？」

「いえ、大丈夫です」

俺はそう言って差し出された手を握って起き上がった。

そして相手にお礼を言おうと顔に目を向けた。

「ツ……君は」

十代後半といったところか。相手の青年が驚きの表情を浮かべている。

それと同時に俺も驚いた。

コイツ、アベルだ。

恰好からして分かった。子どもアベルのゴールドオーブを求めてこの時代に来たのだろう。

教会の方から来たあたり、既にアベルたちは接触したのだと考えられる。

しかし――。

(何か、おかしい)

違和感を感じる。

この大人アベルはどこか様子が……。

しかし、いや……違う。

俺が驚いているのは、バツタリ出会ったからとかそういう事じゃない。

お前……。

(何でそんな悲痛な表情で俺を見るんだ)

それは決して、数年ぶりに幼き同郷の友人と再会した顔ではなかった。

(それじゃ、まるで……)

まるで、故人を見るような目じゃないか。

大人アベルはスツと踵を返し、村の門へと向かい始めた。

俺は咄嗟に追いかけた。

「おい、待てよ！お前！」

大人アベルは立ち止まる。しかしこちらを振り返りはしない。

呼び止めたはいいものの、何を聞けばいいのか。

いや、何から聞いているのかよく分からなかった。

すると大人アベルが口を開いた。

「坊や。君は冒険は好きかい？」

「……ああ」

質問の意図はわからないが、とりあえず肯定した。

「そうか。じゃあ——」

大人アベルが顔を少しこちらに向けて言う。

「君は、冒険をしない方がいい」

……え？

俺は一瞬、大人アベルの言ったことが理解できなかつた。

「なあ、それってどういう……」

俺の声が届く前に、大人アベルは村の門へと歩いていく。



「ま、待て!!」

待ってくれ。

行かないでくれ。

アベル、お前は一体何を経験してきた。

何を見てきた。

(俺は……ッ！)

俺の身に、何があつたんだ！

追いかけるものの、俺は門の近くで足がもつれうつ伏せに転んでしまった。

「クソッ……アベル……」

辛うじて顔を上げ前方を見る。

しかし既に大人アベルは門を通過してしまったようで、その姿を見ることはもうなかつた。

## 第17話 いたずら少女

「イテー……ッ、沁みるな」

俺は自宅で転んで怪我をしたところに薬草を塗り込んでいた。

最初はアベル(子どもの方)を探したついでにホイミで治してもらおうとしたのだが、思った以上にズキズキと痛むため先に治療してから探すことにした。

「珍しいわね、レオンが転んで怪我だなんて」

「まあね……。薬草ありがと、母さん」

「しつかりしてると思いきやまだまだ子どもね」

クスリと母さんが笑う。

ハハハ、この年にもなつて転んで怪我とは情けない。あ、体は子どもか。

「よし」

薬草を塗った上から包帯を巻きつけ終えた。

「んじゃアベルのここ行ってくる」

「気を付けなさいね」

アベルを探しながら俺は考え事をしていた。

というよりも、先ほどのアイツの言葉が頭から離れないのだ。

『君は、冒険をしない方がいい』

どういう意味だ？

恐らくは俺の身を案じての発言だろうということは分かる。

だがあの雰囲気から察するに、未来の俺に何か問題があったというのは確かなのだらう。

……まさかホントに死んだとか？

え、やめて。ゲームオーバー確定の人生なんて想像したくないわ。

俺は若いうちからいつ来るかも分からない死に怯えながら冒険するの？

「ハッ！そうか！冒険なんてやめてお家でぬくぬくしろって事か！」

真顔でボケてみるがツツコミ不在という悲しい状況のせいですぐ我に返った。

「はあ……」

無意識にため息がこぼれる。

もしも俺が未来で酷い目にあうことを大人アベルが忠告してくれているのであれば、俺がアベルの冒険に関わることは果たして本当にアイツの為になるのだろうか。

……正直わからない。

無駄死にする可能性だつてあるだろう。

でも、このまま何もしなければアベルの運命はゲーム通りになってしまいう確率は高い。

だが俺という存在がアベルの冒険に加わることで、少しでも物語が良い方向へと行けるのであれば俺は冒険をやめる訳にはいかない。

俺は改めて決心を固めたのであった。

気づけば宿屋の前まで来ていたようだ。

「アベルの奴どこだ？まさか建物の中とか？」

何となく宿屋の中を窓から覗き込む。

特に誰かがいる訳でもなく、カウンターの方を見ても丁度店主が席を外しているよう

だった。

「別のところ探すか」

カウンターから目を離そうとした時、視界の端に何かを捉えた。

(ん?)

よくよくカウンターの方を見てみると、フワフワと羽ペンが浮いている。

そのままインクのボトルへとペン先が向かい、そして羽ペンは近くにあった宿帳へと向かった。

何だあれ。

まるで透明人間が羽ペンを持ち、宿帳へ何かを記入しているような様であった。

……えッ、ええ!?

何!?!普通に怖いッ!

この村、幽霊が出るなんて設定あったっけ!?

あれか!もしかしてこのレオン、生まれて初めての幽霊との遭遇?

あらヤダ!この光景をカメラで収められないのが何とも歯痒い。

未知との遭遇で暫く興奮していた俺だったのだが――。

(あれ?)

宿屋……宿帳……落書き……。

……あーそうか。わかったわ。

ベラだ。

大人アベルといい、タイミング的に考えてそうだろう。

どうも現実での生活はゲームとの時間感覚にズレが生じるなあ。

まあいいや。

早速接触と行きますか。

俺は勢い良く宿屋の扉を開けた。

「ハイ！その少女、勝手な落書きは悪い事じゃないのかな？」

突然の呼びかけに驚いたのか、羽ペンがポトリと床に落ちる。

そしてベラが「まあっ！あなたには私が見えるの!？」と詰め寄ってくるかと思いきや  
――。

シン……。

(えーっと。あれ?)

何故俺は気づかなかつたのだろうか。

先ほどの羽ペンが浮遊しているように見えていたという事は、最初から俺にはベラの姿が認識出来ていなかったということを。

ど、どうしよう。

「あーあのな、何となく誰かがいるんだろーな。つてことは分かるんだよ。でもごめんな、姿や声を認識できないんだ」

何故かベラに対して変に申し訳なさが込みあがつてき、つい言い訳を始めてしまった。

すると二階から宿屋の主人が降りてきた。

「坊や、何を一人でぶつぶつと言っているんだい？」

「え!? あ、いえ何でもないです」

「ふむ。……おや?」

宿屋の主人が宿帳に目を向けた。

あ、やべ。

宿帳へと落書きをした犯人はベラなのだが、俺にも主人にもベラの存在が認識できな

い。

となると必然的に……。

「コラツ!!坊や、宿帳に何をしている!」  
ですよねー。

\*\*\*\*\*

「クソ……何で俺が」

宿屋の主人に手ひどく叱られた俺は再度アベルを探し始めた。

しかし村を一通り探してみたのだが何故か見当たらない。

「あれー?どこ行つたんだアイツ」

これだけ探して見つからないなんておかしい……。

もしかして、すれ違いでベラと一緒に妖精の村に行こうとしてるとか?

俺は大急ぎでサンチヨの家へと向かった。



「サンチョさん！アベルいる？」

慌てて扉を開けた俺はサンチョに問いかける。

「坊ちゃんですか？少し前に戻ってきたので2階にいると思いますよ」

サンチョがそう言うのと、地下からパスが上がってきた。

（……という事は）

「ありがと、サンチョさん！」

俺は急いで地下へと駆け下りていった。

階段を降りてすぐ奥の部屋に行こうとした瞬間――。

「イテッ！」「いたっ！」

不意に何かにぶつかったせいで尻餅をついてしまった。

「イツツ……て、アベルか」

「あ！レオン兄ちゃん！」

目の前を見ると同じように尻餅をついているアベルとボロンゴがいた。

どうやらアベルとぶつかってしまったようだ。

「お前何で階段の方に向かってたんだ？」

「あ、そうそう！何かね、えるふ？の国が大変で来て欲しいって言われたの。だからレオン兄ちゃんと一緒にっこうと思つて呼びに行こうと思つたんだー！」

なるほど。ベストタイミングだったわけだ。

それにしても、アベルがちゃんと俺を呼びに行こうと思つてただなんてレオン兄ちゃん嬉しくて泣いちゃいそう。

「オーケー、大体のことは把握した。んじゃ、ちよつくらエルフの国とやらを救いに行くかー！」

「うんー！」

「ガウツ！」

地下室の奥を見つめる。

そこには一部時空のゆがみが発生していた。

その中を覗くと、発光する階段が天高く続いており、俺たちは一段ずつ階段を駆け上がっていった。

## 第18話 妖精の村

階段を上がっていた俺たちはいつの間にか光に飲み込まれていた。次第に光は徐々に薄れてき、ぼんやりと周りの景色が見えてきた。

「わ〜〜！」

「おお、すっげえ」

そこには氷の世界が広がっていた。

燦々さんさんと降り注ぐ粉雪。

地面に咲く氷像のような花。

どこまでも続く凍った湖。

全てが幻想的で圧巻の光景だった。

ぼーっと景色に見惚れていると斜め前から声が聞こえてきた。

「あー来てくれたのねッ」

蒼髪の少女がアベルに話しかけている。

（ほう、これがエルフか）

透き通った雪のような肌に、象徴と言わんばかりの尖がった耳。艶のある髪の毛に、人形のように大きな眼。

うん、何と言うかこんな存在が目の前にいるだけでありがたいと言いたい。

俺今までアイドルにハマる奴の心境って良くわからなかつたんだが何となく理解できた気がする。

そんなことを考えながらベラに対し合掌をしていると――。

「さあ、今すぐポワン様の元へ……あれ？」

ベラと目が合う。

「あ、ああッ!!あなた、さっきの!!」

「どうも、あなたの宿帳への落書きのせいで店主にとぼちちりを受けたレオンです」

淡々と自己紹介する俺に対し、ベラの表情が青ざめる。

「ご、ご、ごめんなさい!!私、人間に気づいて欲しくてあちこちでいたずらしてたの! 私のせいで本当にごめんなさいッ!!」

心の底から申し訳ないのか、俺に対してベラは90度のお辞儀で謝っている。

まるで土下座でもするかのような勢いでちよつとビックリした。

……つたく、ここまでされちゃ大人な対応するしかねえな。

「いいよいいよ、全然気にしてないよ。ただホンの30分程店主にガミガミ怒られただけさ。本当はアベルを探していたのに、とぼつちりを受けるなんてね。キミの可愛いイタズラのせいで。たまたま宿屋に寄っただけで俺もあんな事になるとは思わなかったよ。ホントにね、見えもしない妖精が犯人だなんて店主は思わないよね。必然的にあそこにいる俺が犯人になるよね。あーあ、いいよな妖精さんは見えないから疑われもしないんだから」

「ほ……ほほ本当に……ごめんなさいッ……!!」

俺があまりにも真顔でグチグチ言うもんだからベラが涙目になって謝罪をする。

「あ、いや……。すまん、ちよつとからかっただけだ。本当に怒ってるわけじゃないから」

う……まさかベラの奴、冗談が通じないタイプだったなんて。

これがビアンカだったら「めっちゃめっちゃ怒ってんじやない!」とか言つてツッコんで来そうなんだがな。

「グスツ……いえ、元々悪いのは私だから」

ベラは目に浮かべた涙を拭い、再度向き合う。

「私はベラ。この妖精の村の住人よ」

お互いの自己紹介が終わったところで、ベラは俺たちをポワンのもとへと連れて行つた。

「ポワン様。仰せの通りに人間族の戦士を連れて参りました」

「ご苦労様、ベラ。まあ！何て可愛い戦士様ですこと」

ベラやそこの妖精も美しいが、ポワンは群を抜くほど美しかった。

いや、美しいなんてものじゃない。何だか後光が見えてきそうなほど神々しかった。さすが村長とだけはあるな。

良くゲームをやっていた頃にこのポワンのことを勝手に妖精の女王だと勘違いしていたのはいい思い出。

てか村長でこのレベルなら女王つてもう神なんじゃないの？

「め、滅相ありません。こう見えましても彼は……」

「フツツ、言い訳はいいのですよベラ。すべては見ておりました」

ポワンはベラの人間界での行動を監視していたのか。

じゃあベラの所業によってとばっちりを受けた俺に対しての労い、もしくはベラへの処罰なんてこともあり得るのですかねえ。

ゲスな笑みを浮かべていると、離れてこちらを見ていたベラの顔が何故か引きつって  
いた。

そんなことは他所に、ポワンがアベルに声をかける。

「アベルと言いましたね。ようこそ妖精の村へ」

「こ、こんにちは」

アベルは少し緊張した様子でポワンに一礼する。

そんなアベルにポワンは、まるで我が子に向けるような優しい笑みを浮かべる。

「そんなにかしこまることはありませんよ」

ポワンは続けてこう言った。

「あなたに私たちの姿が見えるのは何か不思議な力があるのかも知れませんが……です  
が」

そう言うとポワンは俺の方に目を向けた。

「その少年。あなたは特に不思議です」

その言葉に俺はビクリと驚いた。

不思議って、それって一体……。

「……どういう事ですか？」

「私もハッキリとはわかりません。ですが、恐らくアベルと同じ……いえ、それ以上に異

質なものを微弱ながらあなたから感じます」

俺がアベルと同等？それ以上に異質？

ポワンの言っていることが俺には益々わからない。

……いや、もしかすると俺の存在自体が、という事なのか？

確かに俺はこの世界から見れば、文字通り異質だ。

前世の、このドラクエ5の世界を知った上で転生し、その上スキルという特異なモノを保有している。

その事をポワンはわずかながら感じ取っているということなのだろうか。

俺が難しい顔をして考えていることが伝わったのか、ポワンは優しく俺に言葉をかける。

「感じたことを口にしたまでなので、お気に障ったのなら申し訳ありません」

「い、いえ。因みにその俺の力って、ポワン様から見えてどう思いますか？」

俺のスキル、いや俺の存在はこの世界にとって善なのか悪なのか。

俺の質問に対しポワンは直ぐに口を開いた。

「そうですね。率直に申し上げるのなら、非常に力強く、そして優しさを感じます。あまりそう身構える必要はありません」

優しさ、か。



正直あまりピンとは来ないが、少なくとも俺の存在がマイナスではないのであれば気にしなくてもいいか。

ポワンは改めて俺たちの方へと顔を向けた。

「アベル、レオン。あなた達に頼みがあるのですが引き受けてもらえますか？」

「うん！」

「ああ」

ポワンからある依頼を頼まれた。

内容は、春風のフルートが盗まれたことにより、世界に春が訪れなくなつたから取り戻して来て欲しいということだった。

最近やけに寒い時期が続くと思つたよ。

おのれザイル絶対に許さん。いや、元はと言えば雪の女王がザイルを嗾<sup>けしか</sup>けたからこうなつたんだよな。

雪の女王、テメー火炙りの刑な。

一通り説明を受けた後、ポワンがベラに同行するよう言い、俺たちはポワンの元を後

にした。

\*\*\*\*\*

「……キミ達、恥ずかしくないの?」

現在、ベラは俺たち（主に俺）に対し軽蔑の眼差しを向けている。

「ヘッ！元はと言えばベラが何にも用意してなかったのが悪いんだろ」

「だからと言って防具屋の人が可哀想よ!」

俺とアベルは毛皮のフードを初め、ロープや燭台など様々な備品を抱えていた。

何故このような姿になっているかと言うと、事の発端はこの妖精の村の異常な寒さだった。

そもそも俺とアベルはサンタローズ村よりも寒い、この極寒の環境を耐え凌ぐほどの装備が整っていないかった。

だからベラに防寒グッズを要求したのだがこの妖精、てんで駄目だ。

何が「私に言われても困るよ！ツ！」だよ、アホか。フルート取り返す前に、道中で

体温奪われて倒れるわ。

だから俺はアベルを連れて防具屋の扉を叩き、店主の目の前であたかも『極寒の地に彷徨う貧乏な兄弟』と思わせるような演出をしたのだ。

すると店主が思いのほか優しく、毛皮のフードを譲ってくれたのだ。

これに味を占めた俺は、この機会を逃すまいと店主にあれやこれやと物を要求し結果、現在に至るといふ訳だ。

「んだよー、店主がくれたんだから良いだろー」

「それにしてもやりすぎよ。絶対余分に貰ってるものあるでしょ」

「当たり前だろ。余分な奴はよろず屋で売ってアベルとポロンゴの武器新調する」

「うわあ……」

そんなあからさまに嫌悪感漂わせた目でこつちを見るんじゃない、照れるだろ。

その後、防具屋の店主から慈悲で頂いた余った防具を元手に、よろず屋で石の牙とブーメランを購入した。

「よーし武器、防具も揃ったことだし行くかー」

「おー!」

「ガウツ!」

「ポワン様、こんな子たちを連れてきた私の選択は正しかったのでしょうか……」

若干1名頭を抱えている者がいるが、俺たち一同は春風のフルート奪還のため村を出たのであった。

## 第19話 ドワーフの住む洞窟

村を出た俺たちは、ここから西にあるドワーフの洞窟へと向かい始めた。

武器を購入している時、その隣で風呂に浸かる骨の爺さんに話しかけられ、ドワーフの話が聞かされた。

何でも『鍵の技法』というモノを編み出したばかりに、当時の村長により村を追放されたとのこと。

以来、西にある洞窟を住み家としているようだ。

そして妖精たちの噂によると、北の方には閉ざされた氷の館が存在する。

この館の中に入るにはドワーフが持っている鍵の技法が必要だろう、と俺たちの中で結論が出たので向かっているといるところだ。

何度か敵と遭遇したが今は俺、アベル、ボロンゴ、ベラの四人パーティ。

これ程メンバー数が揃っているのは心強い。

加えてアベルの装備がブーメランになったことで、処理スピードも向上した。

全体攻撃、強エ。

てかこの世界のブーメランって何で敵にぶつかっても戻ってくるの？  
一種のイリユージョンだよ。

そんなこんなで道中は難なく切り抜けることが出来、ドワーフの住む洞窟が見えてきた。

「そう言えば気になってたんだけどさあ」

ベラが唐突に口を開く。

「レオンってさ、人間界では私の事見えてなかったのにどうして私が居るって分かったの？」

「うえ!？」

不意の質問に声が裏返ってしまった。

てか、やっぱり気になってたんかい。

こつちに来て視認出来るようになってからは特に指摘もされなかったからちよつぷり安堵してたんだが。

どうしよう。まともな言い訳なんて用意してないんだが。

「いや、何かこうボヤ〜つと見えた、て言うか……」

「ふーん。まあ、ポワン様もレオンには何か感じていた見たいだし、不思議じゃないのか

もね」

「歯切れの悪い俺の返答を他所に、ベラはどこか納得した様子で特にそれ以上聞いては来なかった。

実はこの件に関して俺にはある憶測があった。

ドラクエ5において妖精の姿を認識出来るのは幼少時代の主人公、そして成長した主人公の息子と娘。

つまり子どもなら妖精の姿を見ることが出来る、という事だ。

今の俺の年齢は9歳。十分条件には入るはずだ。

では何故、俺には妖精の姿を認識できなかったのか――。

恐らく、精神年齢が子どもでは無い、というのが俺の見解だ。

子どもと言うのは「無邪気」なものだ。

だが成長するにつれ誰しも、良い意味でも悪い意味でも様々な事を覚える。

そういった経験を重ねていく事で大人になっていく……という心の成長という意味であれば、俺が妖精を認識出来ない事にも納得がいく。

まあ、俺の前世での生活なんて大したことないけどな。

日頃からゲームばかりでまともな人生体験なんて積んではいなかったが、人間関係の面倒臭さや人の心に潜む悪感情なんて物は嫌でも知っていく訳で。

しかも現実に限らずオンラインゲーム上でもマナーの悪い輩とかいるし。

とまあ要するに、真の意味で「無邪気な子ども」にしか妖精を見ることが出来ない、ということを俺は言いたかったのだ。

はあ……無邪気に家庭用ゲームに没頭していた小学生時代に戻りたい。

少しセンチメンタルな気分浸ったところで、俺たちは洞窟の前へと到着した。

「こんな所に洞窟があるとはね〜。あ！中は少し暖かいわ」

「風も入ってこないしな。洞窟は地熱の伝導も早くないし、ある意味自然界の断熱材だよな」

「レオン兄ちゃん、たまに難しい事言うよね」

到着と同時に、そのまま洞窟の中へと入っていく。



少し奥へ進むと道中に看板が立っており、その先の道は二股に分かれていた。

「何て書いてるの？」

「んーつと…『無用の者立ち入るべからず！』て書いてあるわね」

「俺たちは用があるから関係なし。行くぞー」

そう言いながら俺は右側の道へと歩き始めた。

「ちよつと！相談もなしに勝手に行かないでよ」

「フツ、この手の選択は得意なんだよ。俺の勘に任せてくれ」

もちろんそんな都合のいい勘なんて持ち合わせていない。

前世の記憶に基づく脳内マップを辿っているだけだ。

因みに左を通っても進めなくはないのだが、ただの遠回りになるだけなので気を付けよう。

そうして進んでいると前方にぼんやりと灯りが見えてきた。

近付くとそこは部屋の入口のようで、左右には大きなロウソクが立てられている事が分かった。

そのまま部屋の中を覗くと――。

「キュピュ？」

一匹のスライムが現れた。

それを見たボロンゴはすぐさまスライムへと飛びついた。

「ガウツ!!」

「ヒエ!? おっちゃん助けて〜ツ!!」

驚いたスライムは大きく後ろへと飛び跳ね、ボロンゴの一撃を回避し、そのまま部屋の奥へと逃げて行った。

「アベル! ボロンゴのやつ止めろ!」

「ボロンゴ、めツ!!」

今にもスライムを追いかけて行きそうであったボロンゴは、アベルの言葉を聞いた瞬間、戦闘態勢を止めた。

「なんじゃ? 騒がしいのう」

声のした方を見ると、例のドワーフがそこにいた。

「なるほどの。それで鍵の技法を」

俺たちはここに来た経緯をドワーフに伝えた。

ドワーフは眉間にしわを寄せながら吐き捨てるように愚痴り出した。

「まったく、呆れたもんじゃザイルの奴は。元々ワシはポワン様に追い出された訳じゃ無いのに勘違いしよって。あまつさえ、盗みまで働くとはのう」

そう言うどドワーフは一呼吸置いて頭を下げた。

「妖精の村から来た御方よ。お詫びと言っては何だが鍵の技法を授けよう。そしてワシの孫にキツイお灸を据え、正しき道に戻してやって下され。どうか、この通りじゃ」

「そんな、頭を上げてください！大丈夫です、任せてください」

ベラがドワーフを安心させるよう自信に満ちた返事をする。

「俺たちにとつては春風のフルートが最優先だ。だが爺さん、アンタの孫もきちんと連れ戻す。約束する」

「僕たちに任せて！」

「本当にすまぬ。ありがとう」

少しして、ドワーフは部屋の奥の方へと行きダンスの中を漁る。

そして一つの巻物を手に取り、俺たちのところへと戻ってきた。

「それは？」

「鍵の技法じゃ」

なんとまさかの回収イベント回避。

有難いつちや有難いんだが、こうもあつさりだと何とも拍子抜けだ。

まあ爺さんの手元にあつても不思議ではないか。

するとドワーフは俺に巻物を差し出した。

「えっと、これどうすれば」

「皆で中身を見てみなさい」

そう言われ、俺は恐る恐る巻物を開く。

その横からアベルとベラが覗き込む。

俺も巻物の中をジツと見つめ、その瞬間——不思議なオーラが俺たちを包み込んだ。

それと同時に巻物が突然、ポロポロと崩れ落ち次第に消滅していった。

俺たちは互いに何か変化が起きたか確認するように顔を見合わせており、その光景をドワーフはクククと笑いながら見ている。

「成功じゃよ。どうだ、試しにこれを見てみ」

そう言つてドワーフは小さな鍵付きの木箱を俺たちの目の前に持つてきた。

すると——。

（おお！何だこれ）

分かる。

この木箱にかけられた鍵の構造、どうすれば鍵を解除出来るのか。

鍵穴を見た瞬間に、頭の中で図面が展開される。

それはアベルとベラも同じようだ。

「何か不思議だね!」

「ヤダ!私、何かイケない事してるみたいで罪悪感が……」

目をキラキラさせるアベルを他所に、ベラは後ろめたさからか項垂うなだれている。

「別にいいじゃねーか、悪用するわけでも無えんだから。え、もしかして悪用するんですか?こつこつり誰かの家に忍び込んで、また飯でもつまみ食いするんですか?」

「しないわよ!する訳ないでしょ!!……て、何でレオンがそれ知ってるのよ!」

ベラをからかいつつも、俺たちは鍵の技法を手に入れることが出来た。

そして、次はいよいよ――。

(二回目のダンジョン、か)

レヌール城の時みたく、下手をこかないよう気を付けなければ。

それに俺の力が今後どこまで通用するのも分からない。慎重に行くべきだ。だが、確実に強くはなっていない。俺は職業のせいだ。

俺は職業のせいだ、MPを除くステータスは低い。

だがレベルが上がったことによって、俺は改めて自身がこの世界唯一のスキル持ちであることを認識した。

活路があるとすればココしかない。

俺は再度確認するようにステータス画面を開いた。

---

名前：レオン 性別：男 レベル：15

職業：村人

HP：48／56

MP：88／134

攻撃力：37

守備力：23

呪文：なし

---

スキル：カウンター  
スロウ

## 第20話 二つ目のスキル

鍵の技法を手に入れた俺たちはドワーフの元を後にし、北にある氷の館へと向かい始めた。

その道中、アベルとベラは話をしながら歩いており、その後ろを俺とボロンゴが歩いている。

その間、俺は自身のスキルについて考えていた。

スロウ――。

新たなスキルが発現した事に気が付いたのは、妖精の村からドワーフの住む洞窟へ向かっていく最中のことだった。

洞窟へと到着する直前での戦闘後、自身の状態確認のためにステータス画面を開くとレベルが上がっていた事を確認した。

ステータスを確認しながら視線を下げていくと、何とスキル『カウンター』の下に『スロウ』という文字が表示されていた。



それを見た俺は驚愕と同時に嬉しさが込みあがった。

(やはり、スキルはカウンターだけじゃなかったッ……!!)

この世界で初めてスキルの存在を知った時は、唯一のスキル持ちの俺がカウンターを駆使すれば或いは、とか考えていた。

だがレベルを上げていくにつれ、その甘い期待は徐々に不信感へと変わっていった。理由は簡単、あまりにも俺自身が弱すぎる。

職業が村人である以上、ステータスの上昇に難があるのは仕方がないと割り切っていた。

だがその補填としての技が『カウンター』一つだけというのは正直なところ心が折れそうだった。なにせ、カウンターは一発逆転のスキルという訳ではなく、あくまで敵の攻撃力と同等の力を跳ね返すだけだからだ。

そこで俺はそれに付随して、ある一つの懸念が頭に浮かんだ。

それは、MP量の多さだ。

カウンター1つが30消費するのだから、その為ではとも考えた。

でもそれにしても多すぎる。いや、多いに越したことは無いのだが、仮に今の調子でレベルとMPが上がり続ければ俺は間違いなく魔法使いに匹敵するほどのMP量を保

有する。

それに対してスキルが1つのみと言うのもおかしい話だ。

つまり、俺が言いたいのは『もしかするとスキルは複数個発現するのではないか』という予測だ。

……いや、本当の事を言えばこの予測は俺の願望でしか無かった。

強さを求めていた俺は、目に見えて変化しないステータスに日々焦っていたのだ。

もしかしてそうではないのか——。

こうだったら嬉しいな——。

一度蒔かれた不安の種は、日を重ねることに否いやが応おうでも成長していった。

だから、二つ目のスキルが発現した時、俺は心の底から安堵した。

(まだ強くなれるツ——)

これが分かっただけでも十分な成果だった。

「それよりも」

今はこの『スロウ』について考えなければいけない。

スキル『カウンター』と同様、ステータス画面には名称以外に説明や使用MP量、使い方などは記載されていない。

カウンターの発動タイミングや感覚などは、体に染み付くほど練習する期間があったのだが今回はそうもいかない。

このダンジョン攻略の中で探っていくしかなない。

「つたく、もう少し親切にしてくれよな」

「レオンツ!!」

そうこう考えていると前方からベラの声が聞こえた。

ハッと前を向くと、アベルとベラの目の前に魔物の群れが……て、少し多いな。

「俺とボロンゴが前に出る!アベルとベラは後方から支援してくれ!」

「わかった!ボロンゴ、突撃!」「ガウツ!!」

「了解ッ」

俺は勢いよく走り出した。

モンスターは魔法使い、スカルサーペント、マッドプラント、サボテンボール。

マッドプラントとの会敵は初めてだな。

ボロンゴが魔法使いに飛びついたのを確認し、それはその隣のスカルサーペントに攻撃を仕掛けた。

「早速だけど行くぜ……『スロウツ！』」

俺は左手を敵に突き出し、力強くスキルを唱えた。

俺の予想ではスロウという名前からしてデバフ効果、つまり相手の行動を遅くするものと見ていた。

しかし――。

「うおっ!？」

スカルサーペントの攻撃が俺へと繰り出される。辛うじて剣で受け止めたが、敵の様子を見る限りデバフ効果は見られない。

「クソツ、外れか」

敵を剣で押し除け、一旦距離を置く。

考えろ……考えろ……。

こんな事『カウンター』を探ってた時と一緒だ。

あらゆる状況、タイミングが一致しないと発動しないのならば、数打って発動条件を絞っていくしかない。

さつきは先制で仕掛けて不発だった。なら次は……。

「来い！骨ヤロウツ」

スカルサーペントが俺へと一直線で突っ込んでくる。

そして攻撃を仕掛けるため、骨の尻尾を振りかぶる。

(よしッ、今だ)

俺は剣で防御体制を取りつつ、敵にスロウを発動しようとした。が、意表を突かれた俺は行動に移せなかった。

——ッ!!?

目の前の敵が消えた。

と言うよりも、辺りを見回しても先程の魔物の群れが忽然と姿を消した。

(どういう事だ?)

そう思いながらも、アベル達の姿を確認しようとして後ろを振り返ろうとした瞬間。

ドゴッ!!

「ツぐあ!!」

体の側面から強い衝撃が加わり、俺はその場で膝をついた。

何が起きたんだ!?

俺は防御体制を取りながら周囲を確認する。

しかし先ほどと同様、一向に敵の姿は見えない。  
そう考えていると、またしても俺の体に衝撃が加わる。

(クソツ、いるはずなのに見えない……！)

しばらく耐え凌いでいると、攻撃が不意に止む。

その瞬間、服の襟元を誰かが掴み俺はすぐ側にある木の陰へと連れて行かれた。

そして間髪入れずに、俺の受けた傷がみるみる回復していく。

「……ン……オン!!……レオンツ!!」

「えっ」

ふと我に帰ったような感覚に陥る。

目の前にはベラ、そして俺の隣でホイミを唱えるアベル。

あれ、いつの間に？

「ハア、気がついたみたいね。ごめんなさい、早くマッドプラントを処理したかったのだけどてこずつちやつて」

「えっと、何がどういう……」

「アイツの呪文、マヌーサは幻を見せるのよ。幸い私達にはかからなかったのだけど、レオンは運が悪かったみたいね」

あー、そう言う事か。今までマヌーサかかったこと無かったから自分がかけられてるかもって自覚を持つことがなかった。

呪文にかかったタイミング全然わからなかったな。てかデバフ呪文って俺みたいな貧弱ステータスにとつたら一番厄介なんじゃ……おお恐い。

「私はサボテンボールを相手するわ。体制が整ったら戻ってきて」

「オーケー。すぐ行く」

俺はアベルにボロンゴの援護を頼み、木の陰からスカルサーペントに目を向ける。

敵はベラの方へと向かっている最中だった。

(……)からならどうだ)

スカルサーペントに手を掲げる。

『スロウ』

………チツ、これも外れか。

敵が『俺を視認していない』状態でもダメなようだ。

俺は直ぐさま考えを切り替え、敵の方へ向かい剣を振るう。

スカルサーペントはノックバックした。が、何とスカルサーペントは倒れながらも俺に対し反撃を仕掛けてきた。

(ヤベッ!!)

マジか！その体勢から攻撃すんのかよッ……。

タイミング的に『カウンター』は無理だと悟った。

俺は慌てて防御態勢を取る。それと同時に、反射的にもう一つのスキルを詠唱した。

「『スロウッ！』」

骨の尻尾が、俺の剣へと触れるか触れないかのところで――。

ピタリ。

敵の動きが止まった。

いや、完全には止まっていない。視認出来るレベルで、かなりゆっくりと敵の行動が遅くなっていたのだ。

「ハアッ!!」

好機と思った俺は剣を握り直し、すかさず敵へと一撃を振るう。



「ギエエ!!」

この一撃が止めとなり、スカルサーペントは消滅した。